

平成25年度

卒業研究抄録

北海道教育大学
人間地域科学課程
人間発達専攻
心理学分野

平成 25 年度
卒業研究抄録

北海道教育大学
人間地域科学課程
人間発達専攻
心理学分野

目次

1. 池田 純 集団アイデンティティが格差のある集団間比較に与える影響
2. 池野はるか 朗読聴取が児童の抱く物語のイメージに与える影響
—教師の範読に関連して—
3. 石垣 琴美 内的作業モデルが
児童期・青年期のソーシャルスキル、対人的信頼感に与える影響
4. 菊池和佳奈 化粧における顔印象の自己評価と他者評価
5. 北村 香織 人格特性と精神的健康状態が対人ストレスコーピングに与える影響
6. 木立 明甫 過去のいじめ体験と仲裁・支援行動に関する研究
7. 小林 亮太 大学生における美人ステレオタイプとその性差
8. 齋藤 雅博 異性愛者への性的指向のカミングアウトが
LGB の自己開示に与える影響と精神的健康への効果
9. 篠田 侑紀 青年期の親子関係の良好さに対親行動が与える影響
—家族機能と社会的スキルの側面—
10. 高村亜希子 小学生における学習習慣とウェルライフの関連
11. 田尻 優祐 マキアヴェッリ『君主論』の考察—現代におけるリーダーの在り方—
12. 中沢美由子 音楽による気分誘導効果の検証
13. 原 朋子 民意を反映させるにはどのような施策が有効か
14. 平井 志愛 大学生におけるふれ合い恐怖的心性者の親しい友人に対する意識
15. 増山 秀史 二者間の関係性が及ぼす不公正なパレート改善提案への影響
—富の最大化と分配における公正感—
16. 三浦 祥子 大学生活における意欲および自己効力感と
生涯学習に対する意識との関連について
17. 三浦 征次 自らの死を我々はどのように迎えるべきか—死ぬまでに準備しておくこと—

集団アイデンティティが格差のある集団間比較に与える影響

池田 純

キーワード：内集団ひいき、社会的アイデンティティ、集団アイデンティティ

目的

集団アイデンティティと内集団ひいき

我々の自分自身について持っている自己概念には、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティの2つの側面がある。社会的アイデンティティは「個人がある社会集団に属しているという認識と、その集団の成員であることにともなう価値や情緒的意味から成り立つ自己概念」と定義される (Tajfel & Turner, 1979)。特定の集団に対して個人が抱いている社会的アイデンティティを集団アイデンティティ (以下：SI) という (尾関・吉田, 2007)。SI の下位概念に成員性と誇りがある。成員性は集団の一員としての意識といえ、誇りは所属集団の持つ道徳性や有能さなどの社会的価値を感じることで高まる認知的側面である (尾関・吉田, 2009)。また、成員性は集団のまとまりを導くものである一方で、誇りは集団のもつ有能さや道徳性などの集団価値によって高められるものの、集団のまとまりは成員性を媒介してしか導かないことが明らかにされている (尾関・吉田, 2012)。

社会的アイデンティティの諸研究の知見から、人は自分が所属している内集団とその外部にある外集団を比較する際に、内集団に外集団よりもひいきして高い評価を与える内集団ひいきをおこすことが知られている (Tajfel & Turner, 1979)。内集団ひいきが生起する理由は、人は内集団をひいきすることによる社会的アイデンティティの維持・向上を通して個人の自尊心の維持・高揚の欲求を満たそうとするためと言われている。しかし、集団間に格差のある場合では、低地位集団は高地位集団に有利な次元 (特徴) での比較で外集団ひいきを示し、内集団と高地位集団を内集団にとって有利な次元で比較する

際に内集団ひいきを示さないことがある (松崎・本間, 2005)。

これらの知見から、人は所属集団が優れた特性を有しているか否かにより、自尊心の高揚と維持を目的とした集団間比較を行うか決まると考えられる。つまり、地位の高い集団に属する成員は地位の高さという社会的価値によって誇りを高めることができるため、自己がその集団の一員であるという成員性を高める。そして、自尊感情を維持し高めることを目的とした内集団ひいきをおこすと考えられる。言い換えれば、地位の低い集団に属す成員は誇りを高められないため、内集団ひいきを示さないといえるだろう。そこで本研究は、格差のある集団間比較において SI が内集団ひいきに与える影響について以下の仮説を立て検証した。

本研究の仮説

仮説 1. 低地位集団より高地位集団の誇りは高い。

また、誇りは成員性を高める。

仮説 2. 成員性が低い集団成員より成員性が高い集団成員の内集団ひいきの程度は大きい。

仮説 3. 高地位集団有利次元群は低地位集団有利次元群よりも高い内集団ひいきを示す。

仮説 4. 低地位集団不利次元群は高地位集団不利次元群よりも高い外集団ひいきを示す。

方法

実験デザイン 集団地位 (高地位・低地位) × 比較次元 (高地位有利次元・低地位有利次元) の 2×2 の 2 要因実験デザインで実施した。参加者は地位決定課題に取り組んだ後、内集団の地位を知らされた。その後、今後実験参加する内集団・外集団成員の課題の成績を予測させられた。

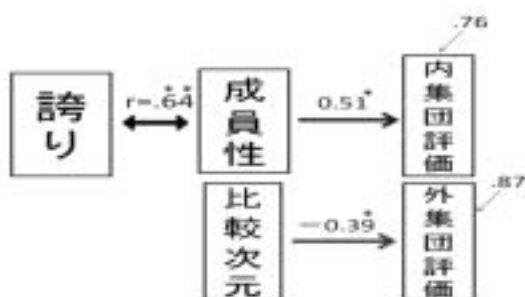
参加者 参加者は北海道教育大学函館校の学生 (男

性：22名，女性26名）各実験群にランダムに配置された。各条件による参加者の人数は，高地位集団の高地位有利次元12名，低地位有利次元12名，低地位集団の高地位有利次元12名，低地位有利次元12名であった。分析にははずれ値を除いた35名分の標本を使用した。

従属変数と独立変数 本研究では，集団地位，比較次元を独立変数。誇り，成員性，内集団評価，外集団評価そして内集団と外集団評価の差（差を「ひいき」と定義）を従属変数とした。誇りと成員性は尾関・吉田（2007）のSI尺度の成員性（7項目）と誇り（5項目）で評定した。また，評価課題についての評価項目として，松崎・本間（2005）が内集団ひいき，外集団ひいきが測定可能と考えた5項目を設定した。

結果と考察

本実験の結果から，仮説1，仮説2，が一部支持され，仮説3，4が支持されなかった。結果を要約すると 集団地位はSIへ影響を示さない。 集団の地位は内集団評価にも外集団評価に影響を示さない。 成員性は内集団評価に正の影響を与える。 比較次元は外集団評価へ負の影響を与えると示唆された（図1）。



「図1 成員性・比較次元が集団評価に与える影響」

の理由には集団成員が地位を内集団の社会的価値として認知していなかったことが考えられる。本実験では，集団間の地位格差を地位操作課題の成績の平均偏差値で操作した。だが，成員は自分の課題の結果が内集団価値に与える影響や他の内集団の成員の結果が集団に与える影響の大きさなどは知ることが出来なかった。また，内集団の課題成績の良さ，つまり地位格差の決め手を実験参加者が自分個人の

課題の結果に帰属させて考えていた場合，地位の高さを集団全体の価値というよりも，自分の価値として認知していた可能性があると考えられる。

から，集団地位は課題の出来の好ましさなどを予測するための手がかりとはならないことが示唆された。つまり，内集団の地位が高いからと内集団の課題のできを高く見積もったり，外集団の出来を低く見積もるわけではないことが示唆された。

そして， から集団間比較において内集団評価には成員性が，外集団評価には比較次元が影響していたことが示唆された。比較次元が外集団評価に影響を及ぼした理由は，外集団を評価する上で手掛かりとなるものが比較次元と内集団と外集団の間の地位格差以外にないため，課題に有利な特徴を内集団と外集団どちらが有しているかで外集団の課題結果は予測されたと考えられる。一方，内集団評価に成員性が影響していたことから，内集団を評価する際には人は集団と自己の結びつきの強さに影響されることが示唆された。しかし，集団地位が誇りを媒介し成員性へ影響することは示されなかったため，成員性へ影響を与える他の要因を検討する必要がある。自己カテゴリー化理論によると人は自分と他の人々との類似性を検討し，自分を含む内集団と外集団というカテゴリー化を行う(Turner et al. 1987)。つまり，自己概念とある集団のもつ特徴の類似度が高ければ人はその集団への成員性を強めると考えられる。本実験では，偽のパーソナリティテストによって参加者は2つの人格特性の集団に振り分けられた。その振り分けられた人格特性のもつ特徴と参加者本人が主観的にもっている自己の特徴の類似性が高い場合，成員性が高まったと考えられる。

以上のことから，集団の地位は集団間比較には影響せず，格差のある集団間比較においてSIの下位概念である成員性が内集団評価を促進させることが示唆された。

(IKEDA Jun)

朗読聴取が児童の抱く物語のイメージに与える影響

教師の範読に関連して

池野はるか

キーワード:朗読聴取, 読解能力, 範読

問題と目的

子どもの読解能力は就学後に体系的に指導される。そのため、読解能力を育成するための初期段階の指導は重要であり、児童にとって親和的である音声言語を介して行うことが効果的である(高橋, 2012)。そこで、小学校における指導において、文章を聴くことである朗読聴取の方法や効果について検討し、教育に役立つ方法を探求していきたいと考える。

本研究の目的は、児童が文章に触れる際に、聴くこと(朗読聴取)の質の違いにおいて抱くイメージに変化が生じるかを検討することである。そこで、朗読聴取の質を変えた実験の後に物語のイメージと理解に関する調査を行い、教師の範読の効果と子どもの読解能力の育成への有用性を検討する。なお、実験・調査の方法においては藪中(2005)の朗読聴取と黙読を比較した研究を参考に再構成して行った。

方法

実験計画

1 要因 2 水準(無意図・意図)の被験者間計画。

実験・調査の時期

2013年9月に実施された。

調査対象者

調査対象者は、函館市内の公立小学校における2年生の児童51名であった。1組(男子13名,女子13名),2組(男子11名,女子14名)を対象とした。各クラスを朗読形態によって無意図群26名,意図群25名にそれぞれ割り当てた。

手続き

実験はすべてクラスごとに集団で実施された。朗読聴取の際は教室での教師による範読を意識して筆者がその場で朗読を行い、無意図群は台詞を意識し

ない通常の朗読、意図群は緑の蛙の台詞を意図していじわるい印象にした朗読を行った。

物語材料

提示した物語は、新美南吉作『二ひきの蛙』(てのり文庫,大日本図書,1988)である。2学年にも理解できる内容であり、文章の量と物語の内容から実験に適切であると判断し使用した。緑の蛙と黄色の蛙が登場し、相手を貶し合っけんかをするが、冬眠を経て相手の良い所に気が付き最後には仲直りするという内容である。

質問紙

(1)物語のイメージ 「今聴いた物語は全体を通してどんな感じの物語だと思いましたか。」という教示文に従って、SD法による5段階評定を求めた。「楽しい かなしい」などの物語の明暗を捉えている項目と、「すき きらい」などの物語の面白さや感動を捉えている項目がある。

(2)登場人物のイメージ 「ものがたりに出てきた緑の蛙はどんな人物だと思いましたか。」という教示文に従ってSD法による5段階評定を求めた。「あかるい くらい」などの登場人物の外見的な明るさを捉えている項目と、「やさしい いじわるい」などの内面的な人物像を捉えている項目がある。

(3)物語の理解

物語の主題の理解:「このお話を通して、作者はどんなことをみなさんにつたえたかったのだと思いますか。」という教示文に従って自由記述による回答を求めた。

登場人物の気持ちの理解:「二ひきのかえるは、「もうけんかはよそう」と言い合ったとき、どんな気持ちだったのでしょうか。」という教示文に従って自由記述による回答を求めた。

感想:「ものがたりのかんそうを、自由にかいてください。」という教示文に従って自由記述による回答を求めた。

(4)物語の既読 『二ひきの蛙』という物語を聞いたことがあるかどうかを、「はい・いいえ」の2択で求めた。

(5)フェイス項目 フェイス項目として、学級、性別、名前を尋ねた。

結果

(1) 物語のイメージ

各群で平均点と標準偏差を算出して t 検定を行ったところ、無意図群と意図群との間に有意な差が認められた ($t(44)=2.37, p<.05$)。このことから、意図群の方が無意図群に比べて物語の内容の明るさと物語の好ましさをより低く捉えていることが示された。なお、性別における差はみられなかった。

(2) 登場人物のイメージ

各群で平均点と標準偏差を算出して t 検定を行ったところ、無意図群と意図群との間に有意な差が認められた ($t(44)=4.31, p<.01$)。このことから、意図群の方が無意図群に比べて登場人物の活動性と柔和性をより低く捉えていることが示された。なお、性別における差はみられなかった。

(3) 物語の理解

記述内容によって分類し、理解の程度について検討を行うことにした。分類は実験者と協力者2名によってKJ法で行った。

物語の主題の理解

記述内容に人数の偏りは認められなかったことから、物語の主題内容の理解に関しては無意図群と意図群とは同等であると言えるであろう。

登場人物の気持ちの理解

記述内容に人数の偏りは認められなかったことから、登場人物の気持ちの理解に関しては無意図群と意図群とは同等であると言えるであろう。

感想文の分析

全体的にみると無意図群と意図群の間で記述内容に大きな偏りは認められなかった。しかし、記述内容をより細かく見たところ、無意図群では物語の場面や展開について記述した感想が多く、意図群では登場人物の気持ちやけんかの様子に注目した感想

が多かった。よって、意図群の方がより具体的に登場人物の人物像を捉えられていた可能性が考えられる。

考察

本研究では、朗読聴取の質の違いが物語のイメージや理解に及ぼす影響を検討した。その結果、意図を持って朗読することの効果と可能性を示唆することができた。

まず、物語のイメージにおいては、意図群の方が無意図群に比べて物語の「明るさ」をより暗く、さみしいイメージの方向で捉えていた。また、物語の「好ましさ」については、無意図群の方が高く捉えるという結果が示された。また、登場人物のイメージにおいては、意図群の方が無意図群と比べて外面的な活動性を低く捉え、内面的な柔和性を低く捉えているということがわかった。このことから、朗読聴取の質の違いによって子どものイメージにも異なった影響が与えられることが示唆された。今回は台詞を「いじわるい」印象にするということでマイナスの方向の意図があり、分析においても物語の印象や登場人物の印象がマイナスの方向に捉えられるという結果がみられた。したがって、意図の性質によって子どもの文章理解に関するイメージへの影響が異なることが推測される。

物語の理解に関する調査は無意図群と意図群の間に大きな差はみられなかったものの、無意図群において物語の構成や全体の展開に関する感想が多かったこと、また、意図群において登場人物の気持ちに迫った感想が多かったことから、台詞などを強調しすぎず丁寧に朗読することが文章全体を理解させることにつながることや、より考えさせたい部分を強調することは子どもの抱くイメージのふくらませ方に効果があるということが示唆された。教師の範読において意図して朗読を行うことが子どもの読解能力の育成につながる可能性が考えられた。

(IKENO Haruka)

内的作業モデルが児童期・青年期のソーシャルスキル，对人的信頼感に与える影響

石垣琴美

キーワード：内的作業モデル，ソーシャルスキル，对人的信頼感

問題と目的

近年，我が国においては，子どもたちの対人関係能力やソーシャルスキルを育むことが困難になり，問題行動や，いじめ等の増加にもつながっている。また，心理・社会的不適応状態を呈する学生の割合が急増しているため(堀・小林，2010)，大学生の心理・社会的適応を支援することは，大学教育における重要な課題のひとつである。小・中・高等学校においては，問題行動の未然防止の方法として，ソーシャルスキルトレーニングや，共感的な人間関係の育成に努めている(文部科学省，2010)。

しかし，生徒の教師に対する信頼感には，教師側の要因だけではなく，生徒の幼少期における両親への愛着といった心理的な要因も関連することが明らかとなった(中井・庄司，2007)。

Bowlby(1969,1973,1980)によると，人は，幼児期に主要な愛着対象との経験から，内的作業モデル (Internal Working Models；以下，IWM) を形成する。IWM とは，自分は愛され助力してもらえる存在なのか，相手が自分の求めにいかに応じてくれるのか，などという，他者と自己の関係についての心的表象モデルである。IWM は「安定型」「アンビバレント型」「回避型」の 3 タイプが見出され，このような IWM の個人差によって，対人関係のスタイルの形成にも影響を与えられている。

先行研究において，IWM の，「安定型」得点の高い人はソーシャルスキルが高く，「アンビバレント型」得点の高い人はソーシャルスキルが低いという結果が示唆された(粕谷・菅原・河村，2000)。また，ソーシャルスキルが欠如していると学校不適応やス

トレスフル状態になり，ソーシャルスキルを獲得している生徒は友人との良好な人間関係を築き，学校生活に満足し，そのことにより自己や他者への信頼が高まり自尊感情を形成する要因にもなっていることが明らかになった(吉川・高橋，2007)。これらのことから，IWM「安定型」はソーシャルスキル，对人的信頼感の「自分への信頼」，「他人への信頼」と正の関連を示す(仮説 1)，IWM「アンビバレント型」はソーシャルスキルと負の関連，对人的信頼感の「他人への信頼」，「不信」と正の関連を示す(仮説 2)，IWM「回避型」はソーシャルスキルと負の関連，对人的信頼感の「不信」と正の関連を示す(仮説 3)，と考えられる。また吉川ら(2007)の研究より，「IWM」「ソーシャルスキル」「对人的信頼感」という因果関係モデルが採択される(仮説 4)，と考えられる。

また，Bowlby (1969,1973,1980)によると，IWM は乳幼児期，児童期といった未成熟な時期に徐々に構成され，加齢とともに可塑性を減じ，安定性を増し，青年期以降，一生を通して比較的变化せず持続するとされる。そこで，本研究では，児童期と青年期の発達段階の違いも考慮する。

方法

調査対象者

北海道の公立小学校に通う児童 149 名，北海道の国公立大学に通う学生 141 名が対象とされた。

調査時期

2013 年 7 月～8 月に実施された。

調査内容

(1)内的作業モデル尺度(戸田，1998)18 項目(2)信頼感尺度(天貝，1995;1997)24 項目(3)学校生活ス

キル尺度(中学生版)(飯田・石隈, 2002)のうち 14 項目, すべての尺度において, 小学生版, 大学生版に文章を修正し, 使用した。

結果と考察

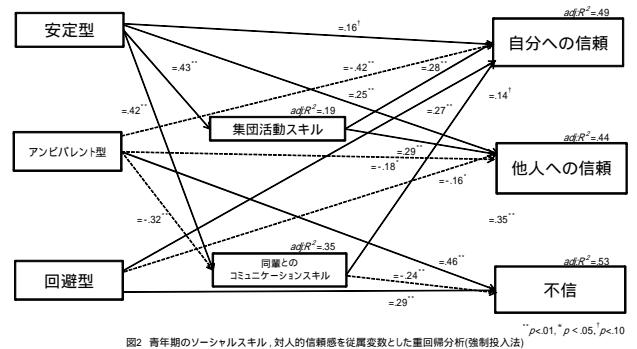
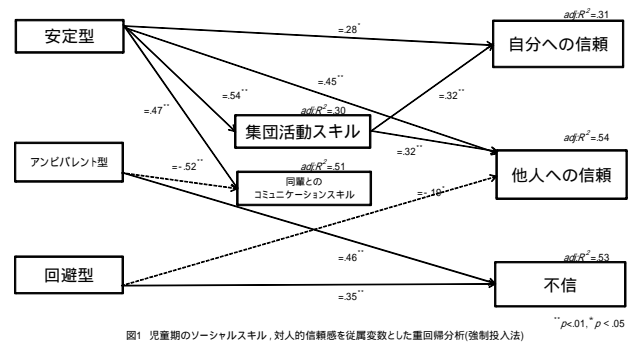
分析の結果, 児童期・青年期において, IWM が「安定型」であれば, 「集団活動スキル」, 「同輩とのコミュニケーションスキル」が高く, 「自分への信頼」, 「他人への信頼」が高まることが示された。よって, 仮説 1 は支持されたと言える。この結果は, 粕谷ら(2000)の結果や, 安定型が自分は援助してもらえ存在であるという表象をもつという IWM の定義を支持するものであった。

また, 児童期において, IWM が「アンビバレント型」であれば, 「同輩とのコミュニケーションスキル」が低く, 「不信」が高まることが示された。青年期においては, IWM が「アンビバレント型」であれば, 「同輩とのコミュニケーションスキル」, 「自分への信頼」, 「他人への信頼」が低く, 「不信」が高まることが示された。よって, 仮説 2 は一部支持されたと言える。これは「アンビバレント型」の特徴である, 他人への不信を支持しているものであり, また, 児童期に比べ, 青年期の方が多くの経験をしている分, 裏切られたり, 失望するなどの, 複雑な経験も多くなり, その経験が影響しているのではないかと考えられる。

さらに, 児童期において, IWM が「回避型」であれば, 「他人への信頼」は低く, 「不信」は高まることが示された。青年期においては, IWM が「回避型」であれば, 「自分への信頼」, 「不信」は高まり, 「他人への信頼」は低くなることを示された。よって, 仮説 3 は一部支持されたと言える。

分析全体を通して, 児童期においては, 「安定型」「集団活動スキル」「自分への信頼」という関連が見出された。青年期においては, 「安定型」「集団活動スキル」「自分への信頼」, 「安定型」「集団活動スキル」「他人への信頼」, 「安定型」「同輩とのコミュニケーションスキル」「自分への信頼」, 「安定型」「同輩とのコミュニケーションスキル」「不信」, 「アンビバレント型」「同輩とのコミュニケーションスキル」「自分への信頼」, 「アンビバレント

型」「同輩とのコミュニケーションスキル」「不信」という関連が見出された。しかし, 積極的に「IWM」「コミュニケーションスキル」「対人的信頼感」というモデルは採択することができなかった。よって, 仮説 4 は一部支持されたと言える。



また, 児童期・青年期の「安定群」, 「アンビバレント群」, 「回避群」それぞれのソーシャルスキル, 対人的信頼感の得点の差は, 有意に青年期の方が高いことが示された。よって, 児童期よりも青年期の方が IWM が安定していることが示唆された。これは, Bowlby(1969, 1973, 1980)の示しているように, 児童期に比べ, 青年期の方がより多くの経験を積んでおり, そのなかで試行錯誤することによってスキルを身につけ, 他人とのかかわりの中で身に付けたものだと考えられる。

本研究では, IWM が, 直接, 対人的信頼感に影響を与えることも示されたが, ソーシャルスキルを介することによって, 自分への信頼, 他人への信頼を高め, また, 不信を低くするという結果が得られた。よって, ソーシャルスキルは対人的信頼感へ多大な影響を持つことが考えられる。今後は, ソーシャルスキルトレーニングなどを活用し, ソーシャルスキルを習得し, 高め, さらに日常的に活用することで, よりよい人間関係を築けると考えられる。

(ISHIGAKI Kotomi)

化粧における顔印象の自己評価と他者評価

菊池和佳奈

キーワード：化粧，印象，公的自意識，私的自意識

問題と目的

今日において化粧は、女性を中心に日常的に行われている行為である。阿部(2002)は、化粧を、化粧水などのスキンケア的化粧と、口紅やアイシャドウといったメーキャップ的化粧に分類できると述べている。また、化粧をする動機は自意識(自分に対する意識)と関係があり、スキンケア的化粧は感情など自分の内面的な部分に向けられる私的自意識と、メーキャップ的化粧は外見や言動など自分の外面的な部分に向けられる公的自意識とそれぞれ関係が深いとも述べている。これらの化粧のうち、本研究ではメーキャップ的化粧を取り上げ、化粧が施された顔(以下、化粧顔)に対する化粧をした本人の印象評価(以下、自己評価)と他人からの印象評価(以下、他者評価)がどれほど一致するか検討することを目的とした。また、どのような顔の部位やその特徴、化粧の要素が印象を左右しているのかについても検討した。

公的自意識が強い人は他者からの視線を強く意識しているため、化粧をした際にも他者視点を中心とした自己評価を行うと考えられる。よって、自己評価が他者評価と高く一致している人の公的自意識は高くなると予想する(仮説1)。また、色彩から受ける心理効果には性差がある(大森・和田,2009)ことから、多様な色を使用する化粧においても、印象の捉え方に性差が出ると考えられる。よって、男性の他者評価とよりも女性の他者評価の方が自己評価は一致すると予想し(仮説2)、これら2つの仮説をもとに研究を進めた。

方法

実験

実験 で使用する参加者の素顔と参加者自身が

施した化粧顔の画像を集めること、その素顔と化粧顔に対する参加者自身での評価を行った。

参加者 女子大学生 24 名

尺度 印象評価には、予備調査で作成した「地味な 派手な」「明るい-暗い」などのSD法に基づく印象評価尺度12項目(7件法)を使用した。また、自意識を測るために私的自意識に関する10項目と公的自意識に関する11項目の計21項目(7件法)から構成される菅原(1984)の日本語版自意識尺度を使用した。他、「(顔の部位)が(特徴)から(印象)」(例「(目)が(大きい)から(かわいい)」)という形の文章完成法で印象評価の理由も尋ね、「化粧をする際に意識したこと」など化粧への意識を尋ねる独自の自由記述のアンケートを用いた。

手続き 参加者の素顔を撮影し、参加者自身が化粧を施した後、化粧顔も撮影した。撮影した画像はPC画面で表示し、印象の評価を求めた。

分析 実験 のデータとともに分析を行った。

実験

実験 で集めた素顔と化粧顔の画像に対する他者評価を行い、その評価が自己評価とどれほど一致するかを検討した。

参加者 大学生 152 名(男性 72 名、女性 80 名)

尺度 実験 と同様の印象評価尺度を使用し、また、文章完成法で印象評価の理由も尋ねた。

手続き PC画面で表示した5名分の素顔と化粧顔の画像計10枚に対し印象評価を求めた。なお、参加者と画像の人物の間には面識がないようにした。

結果

それぞれの化粧顔で、自己評価と他者評価について印象評価尺度12項目のt検定を行い、有意水準10%を基準に有意差がみられなかった項目を両者の評価が一致しているものとした。このとき、

総合考察

平均一致項目数は 10.88 項目 (SD 1.39)であった。

この平均一致項目数を基準に、一致項目が 10 項目以下を一致率低群 ($n=6$, 平均 9.00, SD 1.55), 11 項目以上を一致率高群 ($n=18$, 平均 11.50, SD 0.51)として、両群の私的自意識(低群:平均 5.15, SD 0.63, 高群:平均 5.16, SD 0.67)と、公的自意識(低群:平均 4.88, SD 0.64, 高群:平均 4.78, SD 0.64)のそれぞれで t 検定を行った。両群の私的自意識には有意な差は見られず ($t(24)=.04$, ns), 公的自意識でも有意な差は見られなかった ($t(24)=.30$, ns)。

化粧顔における一致項目数について、男性 ($n=72$, 平均 11.26, SD 1.10)と女性 ($n=80$, 平均 10.70, SD 1.66)で t 検定を行った。男女の間に一致項目数の有意な差はみられなかった ($t(152)=1.25$, ns)。

実験 で尋ねた「化粧をする際に意識したこと」と、実験 ① の文章完成法で求めた評価の理由から、顔の部位とその特徴を KJ 法で分類し、どれほどの人数の割合が注目していたかを化粧時・自己評価・他者評価(男女)ごとに Figure1 に示した。

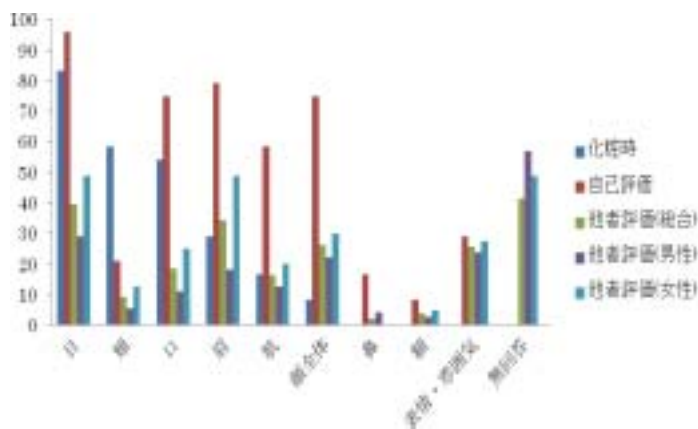


Figure1-1. 顔の注目部位

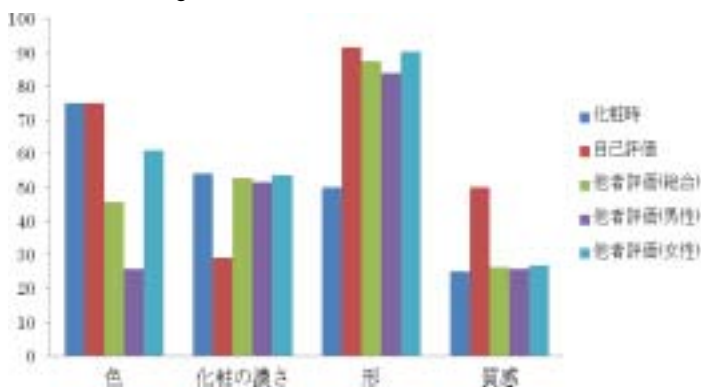


Figure1-2. 顔の注目特徴

化粧顔において、自己評価と他者評価は評価項目の約 9 割が一致していた。このとき、一致率と自己評価者の自意識、及び、性差との関連は見出すことができず、仮説 1・2 とともに支持されなかった。このような結果となった理由として、自意識の得点が高い方に偏っていたため、自意識の高・低群に明確な差がなかったことが考えられる。また、自己・他者評価者の年齢が 20 歳前後と同じ年代であったことが、一致率を高くしたと考えられる。

仮説は支持されなかったが、顔の注目部位や特徴では、化粧時や自己・他者評価、男女のそれぞれの中で注目する箇所に異なる点があるという興味深い結果が得られた。眉は化粧時や男性にはあまり注目されていないが、自己評価や女性においては注目される。また、化粧時に顔全体を意識する人は少ないが、評価では顔全体が注目される。特徴では、化粧時は色使いを意識している人が最も多いが、評価では眉の上がり下がりや目の大きさといった形が最も注目される。特に、男性は、色や肌質や唇の潤い感といった質感には注目せず、形と化粧の濃さで評価を行っていることもうかがえる。これらのことから、化粧をする際には、目や形を意識すること、相手が女性であれば眉や色を意識することでも相手に印象を捉えてもらいやすくなると考えられる。また、化粧時には細かな部位に意識を向けがちであるが、全体的なバランスや仕上がりに意識を向けることも印象を捉えてもらいやすくなると考えられる。

さらに本研究を発展させるためには、自意識との関連のみではなく、他者意識(他者への注意や関心)との関連も含めて検討することや様々な年代の印象評価を比較することが必要である。また、本研究では、どのような顔の部位がどのような印象につながっているのかまで明らかにすることができなかったため、今後、特定の顔の部位や特徴に焦点をあてた研究が必要であると考えられる。

(KIKUCHI Wakana)

人格特性と精神的健康状態が対人ストレスコーピングに与える影響

北村 香織

キーワード：外向性，情緒不安定性，精神的健康状態，対人ストレスコーピング

問題と目的

ストレスへの対処行動はコーピングと呼ばれ、「ストレス反応を低減するためになされる心理的ないし行動的努力」と定義される(Lazarus, R.S., & Folkman, S., 1984)。対人ストレスに対するコーピングは対人ストレスコーピングと呼ばれ、ポジティブ関係コーピング、ネガティブ関係コーピング、解決先送りコーピングの3つに分類されている(加藤, 2000)。ポジティブ関係コーピングは、ストレスフルなイベントに対して、積極的にその関係を改善し、よりよい関係を築こうと努力するコーピング、ネガティブ関係コーピングはそうした関係を放棄・崩壊するような行動をとるコーピング、解決先送りコーピングはストレスフルなイベントを問題とせず、時間が解決するのを待つような行動をとるコーピングである(加藤, 2000)。

近年のストレス研究の多くは、Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984)の研究に基づき、個人の心理的ストレス過程において、「先行条件 認知的評価 コーピング 精神的健康」という一連の流れが想定されている。しかし、精神的健康は人格特性やコーピングから影響を受けるのみではなく、精神的健康状態の違いによっても同じ対人ストレス状況において、コーピングが異なる可能性が考えられる。そこで本研究では人格特性と精神的健康状態が対人ストレスコーピングに与える影響を検討する。その際に、近年の研究では、精神障害がなく well-being も高いという二次元から精神的な健康が捉えられていることを踏まえ(田中・津田・神宮, 2006)、個人の精神的健康状態を測定するために、ポジティブな側面とネガティブな側面の両方から検討する。

外向性が高いほどポジティブ関係コーピングを選択する傾向が高いこと(加藤, 2001b)、相手の立場に立って考えるなどのポジティブ関係コーピングは、抑うつを低下させる効果があること(谷口, 2013)などから、

外向性が高く、精神的健康状態が高いほど、ポジティブ関係コーピングを選択することが考えられる(仮説1)。また、情緒不安定性が高いほど、ネガティブ関係コーピングを選択する傾向が高いこと(加藤, 2001b)、ネガティブ関係コーピングが心理的ストレス反応を増加させること(加藤, 2001a)などから、情緒不安定性が高く、精神的健康状態が低いほど、ネガティブ関係コーピングを選択することが考えられる(仮説2)。

方法

調査対象者

国立大学に通う大学生に質問紙を配布し、回収された219名を対象とした。

調査時期

2013年7月下旬～8月上旬に実施された。

調査方法

個別記入式の質問紙を用いた。大学教員に調査協力を依頼し、講義時間内に質問紙を配布し、集団で調査を実施した。

調査内容

フェイスシートで専攻、学年、年齢、性別が尋ねられ、続いて以下の質問への回答が求められた。質問紙のフェイスシートには上記の内容に加えて、倫理的配慮として質問すべてに対して拒否権があること、拒否しても不利益がないことを明記した。

- (1) 人格特性：並川・谷・脇田・龍谷・中根・野口(2012)のBig Five尺度短縮版が使用された。29項目7件法で回答が求められた。
- (2) 精神的健康：個人の精神的健康をネガティブな面から測定する目的で日本語版GHQ-12の12項目と、個人の精神的健康状態をポジティブな面から測定する目的で、近藤・鎌田(1998)の生きがい感スケールの一部「現状満足感」5項目が使用された。
- (3) 対人ストレスコーピング：加藤(2000)の対人スト

レスコーピング尺度が使用された。34 項目 4 件法で回答が求められた。

考察

結果

仮説 1, 仮説 2 を検証するため, 外向性, 開放性, 情緒不安定性, 調和性, 誠実性, GHQ-12, 現状満足感を独立変数とし, それぞれの対人ストレスコーピングを従属変数とする重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った。その結果, ポジティブ関係コーピングには, 外向性 ($\beta = .31, p < .01$), 情緒不安定性 ($\beta = .22, p < .01$), 調和性 ($\beta = .14, p < .05$) から有意な正の標準偏回帰係数が得られた。調整済み決定係数は, $adj. R^2 = .10$ であった。ネガティブ関係コーピングには, GHQ-12 ($\beta = .16, p < .05$) から有意な正の標準偏回帰係数が得られた。調整済み決定係数は, $adj. R^2 = .02$ であった。解決先送りコーピングには, 現状満足感 ($\beta = .25, p < .01$) から有意な正の標準偏回帰係数が得られ, 誠実性 ($\beta = -.36, p < .01$) から有意な負の標準偏回帰係数が得られた。調整済み決定係数は, $adj. R^2 = .19$ であった。また, 開放性はいずれの従属変数にも有意ではなかった。

表1 対人ストレスコーピングを従属変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)

| 独立変数 | 従属変数: 対人ストレスコーピング | | |
|------------|-----------------------|-----------------------|---------------------|
| | ポジティブ関係コーピング N=214 | ネガティブ関係コーピング N=214 | 解決先送りコーピング N=214 |
| 外向性 | .31** (.25**) | - (.11) | - (.07) |
| 開放性 | - (.20**) | - (.04) | - (.03) |
| 情緒不安定性 | .22** (.11) | - (-.01) | - (-.17*) |
| 調和性 | .14* (.07) | - (-.06) | - (.01) |
| 誠実性 | - (-.05) | - (-.06) | -.36** (-.36**) |
| GHQ-12 | - (.10) | .16* (.16*) | - (-.16*) |
| 現状満足感 | - (.16*) | - (.00) | .25** (.26**) |
| $adj. R^2$ | .10 | .02 | .19 |

** $p < .01$, * $p < .05$.

注) 表中の上段の値は標準偏回帰係数()を示し, 下段のカッコ内の値には単相関係数を示した。 R^2 には調整済み決定係数の値を記載した。表中の「-」はその変数がモデルに投入されなかったことを示した。

本研究の目的は, 人格特性と精神的健康状態が対人ストレスコーピングに与える影響を検討することであった。

分析の結果, 外向性, 調和性, 情緒不安定性が高いほど, ポジティブ関係コーピングを選択することが示された。しかし, 精神的健康状態とポジティブ関係コーピングの関連は見られなかった。よって仮説 1 は一部支持された。外向性の高さは, 社会的であると考えられ, 調和性の高さは, 協調性, 向社会的行動, 他者への愛情や思いやりを意味する (加藤, 2001b)。そのため, 自ら歩み寄ったり, 他者への配慮に対する意識が強く, ポジティブ関係コーピングを選択したと考えられる。情緒不安定性の高さは, 不安感を感じやすく動揺しやすい側面を持つことを表す (戸塚・上北・狩野, 2011)。そのため, 対人関係をよりよいものへ改善し, 安心したいという意識が働き, ポジティブ関係コーピングを選択したと考えられる。また, 精神的健康状態が低いほどネガティブ関係コーピングを選択することが示された。しかし, 人格特性とネガティブ関係コーピングの関連は見られなかった。よって仮説 2 は一部支持された。精神的健康状態が低い者は, 現状満足感が低く, 抑うつや不安感が高いと考えられる。そのため, 対人関係においても悩みがちであったり, 問題を抱え込みやすく, 対人ストレスに対して上手く対処することが出来ずに対人関係を積極的に放棄するようなネガティブ関係コーピングを選択したと考えられる。また, 精神的健康状態が高く, 誠実性が低いほど, 解決先送りコーピングを選択することが示された。誠実性の高さは計画性, 勤勉性, 良心性を意味している (加藤, 2001b)。そのため, 誠実性の低い者は, 未来のことを深く考えず, 他者とあまり干渉し合わずに生活したいという意思が働き, 対人ストレスの相手に対して距離を置くような態度を取る解決先送りコーピングを選択したと考えられる。さらに, 現状に満足し, 精神的健康状態が高い者は, 主観的幸福感が高いと考えられる。そのため, 対人ストレスに対してもそれほど気にすることなく自然の成り行きに任せ, 解決先送りコーピングを選択し時間が解決するのを待つような行動を取ったのだと考えられる。

(KITAMURA Kaori)

過去のいじめ体験と仲裁・支援行動に関する研究

木立明甫

キーワード：いじめ、仲裁行動、支援行動、仲裁者

目的

他人に相談しないことが多くなることが特徴となることを指摘した。

日本におけるいじめと定義

いじめは日本だけでなく、世界に共通する大きな教育問題であり、社会問題である。いじめは、古今東西を問わず、どの時代や社会にもみられるものであるが、昨今の青少年のいじめは、単発的ケンカやいじわるではなく、長期にわたって持続し、陰湿化しており、子どもたちの心の発達にとって、きわめて重大な影響を及ぼしている。その要因として菅野・桂川(2012)は、少子化社会の進行や、地域社会の脆弱化、二分割思考に陥った競争社会、過剰な消費社会、情報社会の発展等が指摘されている。

文部科学省は現在、いじめを平成 18 年から「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わない」と定義している。

発達段階といじめの特徴

菅野・桂川(2012)は、いじめの特徴として、小学校低・中学校では、「教師(大人)から見えやすいいじめ」であり、自己中心性が残っていること、小学校高学年になると、「教師(大人)から見えにくいいじめ」になり、子どもなりにプライドが出てくること、中学校になると、方法も複雑かつ巧妙になり、「いじめ」と判るまで多くの時間が経過する。集団によるいじめも多くなる。さらに高校では、いじめの発生に周りが気付いていることが多く、いじめの方法の高度化・巧妙化し、

いじめの形態といじめの四層構造

現在起こっているいじめは主に 4 つの形態に分けることができる。森田・清永(1994)

物理的いじめ型：金品を取り上げる、暴力をふるうなど、被害者に経済的・身体的被害を与える行為。

物理的ふざけ型：着ているものを脱がすなど、物理的行動によって被害者の恥をかくことを楽しむ行為。

心理的いじめ型：悪口、無視など仲間はずれの行為。

心理的ふざけ型：つねったり、物を取り上げたりなどして、相手の困っている姿を見て楽しむ行為。さらに、現代のいじめをいじめられる被害者といじめる加害者、周りではやしたてる観衆、黙って見ている傍観者、傍観者から分化していじめを止めに入る仲裁者の四層構造になっていると述べている。

いじめ場面における仲裁・支援行動

塚本(2009)は、仲裁行動は「被害者と加害者の間に割って入る行動」であるのに対し、支援行動を「被害者を支える行為」と捉え、いじめの抑制や、被害者の孤独感の軽減が可能であるとし、第三者の仲裁・支援行動に焦点を当てる研究の必要性を述べているが、いじめ場面における仲裁・支援行動に関する研究は少ない。

そのため、本研究では、小学校低・中学年、高学年、中学生、高校生の 4 つの時期に分け、各時期のいじめ体験、仲裁・支援行動の有無とその内容を明らかにす

ること、いじめを体験した時期や、いじめの種類が、仲裁・支援行動にどのような影響を及ぼすかを明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象者

北海道教育大学函館校の学生 201 名(男性 77 名、女性 124 名)を対象に質問紙調査を行った。

調査方法

質問紙の内容は「小学校低・中学年、小学校高学年、中学校、高校それぞれの時期のいじめ体験の内容」「仲裁・支援行動の有無・内容」の2つであり、最初にフェイス項目として性別と年齢を尋ねた。

分析方法

χ^2 検定を行った。

結果

各時期のいじめ体験の有無・役割・形態

いじめの有無について中学校は、他の時期に比べいじめ体験者が多く($\chi^2(1)=8.389, p<.01$, $\chi^2(1)=3.9806, p<.05$, $\chi^2(1)=62.499, p<.001$)、高校は、他の時期に比べいじめ体験者が少なかった($\chi^2(1)=29.906, p<.001$, $\chi^2(1)=36.571, p<.001$, $\chi^2(1)=62.499, p<.001$)。いじめの役割では、全ての時期において傍観者が最も多かった($\chi^2(4)=24.151, p<.001$, $\chi^2(4)=44.728, p<.001$, $\chi^2(4)=76.584, p<.001$, $\chi^2(4)=27.094, p<.001$)、小学校高学年では、観衆は仲裁者に比べ多く($\chi^2(1)=5.053, p<.05$)、中学校では、被害者は加害者に比べ体験したものが多かった($\chi^2(1)=4.477, p<.05$)。いじめの形態では、全ての時期で心理的いじめを体験した者が多く、次いで、心理的ふざけ型が多かった($\chi^2(3)=97.771, p<.001$, $\chi^2(3)=126.814, p<.001$, $\chi^2(3)=143.299, p<.001$, $\chi^2(3)=38.648, p<.001$)。

いじめ体験の時期、種類と仲裁・支援行動との関連

小学校低・中学年の、物理的ふざけ型の仲裁行動は、心理的いじめ型、心理的ふざけ型に比べ、多かった($\chi^2(1)=6.492, p<.05$, $\chi^2(1)=6.334, p<.05$)。中学校での、心理的ふざけ型の仲裁行動は、心理的いじめ

型に比べ多かった($\chi^2(1)=7.816, p<.01$)。高校での心理的いじめ型は、物理的いじめ型に比べて支援行動が多かった($\chi^2(1)=5.181, p<.05$)。

考察

小学校低・中学年から高校までいじめを一度も体験したことが無いものは約 25%あり、森田ら(1997)の見解を支持しているとは言い難い結果となった。調査への協力がしづらかった点や、周りでいじめが起こっていても認知することが出来なかった点が要因だと考えられる。

いじめを体験する時期によっていじめの形態が大きく変わることがない事が明らかとなり、いじめの本質は時期によって大きく変わらないものの、可視性や手口の巧妙さや、バリエーションの違いについては、いじめ体験の時期に影響することが考えられる。

小学校低・中学年では、物理的ふざけ型の仲裁行動は、心理的いじめ型、心理的ふざけ型に比べ多いことが分かり、小学校低・中学年のいじめの特徴である行為に自己中心性が残るという点で、周りの児童が「このいじめはいじめている側が悪い」と認識しやすく、加えて残虐性の高い物理的ふざけ型は仲裁行動が起こしやすいと推測される。中学校では、心理的ふざけ型の仲裁行動は、心理的いじめ型に比べ多く、この時期では相手の気持ちを推し量れるようになるため、陰湿ないじめの中でも加虐性の強い心理的ふざけ型の仲裁行動が多いと考えられる。さらに、高校の心理的いじめ型の支援行動は、物理的いじめ型に比べ多いことが分かり、高校では、他の時期よりもいじめが巧妙化、高度化し、そのリスクも高くなるため、他のいじめの形態に比べ加虐性の低い心理的いじめ型の支援行動が多くなると考えられる。

本研究の課題としては、なぜいじめを体験した時期や形態が影響したのか、仲裁行動生起モデル(塚本 2007)とのさらなる検討や、直接的な仲裁・支援行動だけでなく「いじめられている子に教師に頼んで手紙を渡した」など間接的に行われる仲裁・支援行動にも焦点を当て、今後更なる研究がされていく必要があると考える。

(KIDACHI Akiho)

大学生における美人ステレオタイプとその性差

小林亮太

キーワード：美人ステレオタイプ，美人度，好意度，性差

問題と目的

美人ステレオタイプ

林・津村・大橋（1977）で相貌特徴が相手の性格特性のイメージに相関を示したように，容姿は日常でも相手の印象形成や判断に影響を及ぼす。小野寺（1989）は，「容姿の美しい者ほど社会的に望ましいパーソナリティを有する」という美人ステレオタイプの存在を示唆した。また，垣内（1996）は美人ステレオタイプにおいて美しさ（以下，美人度）が直接望ましいパーソナリティに影響を及ぼすのではなく，対象の個人的好ましさを（以下，好意度）を媒介して望ましいパーソナリティに影響を及ぼすという認知過程を示した。

美人ステレオタイプの研究はこれまで評価の対象（以下，刺激人物）に女性ばかりが用いられてきたが，戸田・菅野・加納・高橋（2012）は男性を刺激人物とした場合でも従来の好意度を媒介した美人ステレオタイプが見られることを示した。加えて，女性が評定した場合のみ「活動性」を示すパーソナリティに美人度が直接結びついていたことや，小野寺（1994）では評定者が女性のみであったことから，男性を評定した場合のみ評定者間で反応の散らばりが大きかったことから，美人ステレオタイプにはその大きさや影響を及ぼすパーソナリティに性差が生じている可能性がある。しかしこれまでの研究では評定者と刺激人物に男女双方を用いた研究や男女での差異の検討はほとんど行われていない。そこで本研究では，評定者と刺激人物に男女双方を用いても従来の美人ステレオタイプが確認できるか，また美人ステレオタイプに性差が見られるかどうかを検討する。

美人ステレオタイプと性差

松井（1993）では男性は女性に比べて身体的魅力を重視することが示されており，また川西（1993）では男性の方が社会的望ましさを好ましい顔からの影響を受けやすいことを示した。このことから，身体的魅力を重視することは美しさの影響を高め，美人ステレオタイプを促進することを予測する。また，男性が評定者の場合はより身体的魅力を重視するとされているため，美人ステレオタイプもまた促進されると推測する。

仮説1：美人ステレオタイプは男性が評定した場合に促進される。

加えて高坂（2010）では女性は恋人に対する身体的魅力を友人よりも，男性は恋人，異性友人，同性友人の順でそれぞれ身体的魅力を重視すること，豊田（2004）の大学生における好かれる特徴の研究では，容姿に関連する特徴が同性に比べて異性に対して多く挙げられている。このことから，同性に比べて異性に対して身体的魅力はより重視され，また美人ステレオタイプも異性が評定する場合に促進されると推測する。

仮説2：美人ステレオタイプは異性が評定した場合に促進される。

方法

予備調査

目的 各写真の美人度・好意度を測定し，本調査で使用する顔写真を選定する

方法 調査対象者である北海道教育大学の学生40名（男性20名，女性20名）に顔写真80枚（男性40枚，女性40枚）から男女各10枚を1枚ずつ順に提示し，戸田（2012）で使用された美人度・好意度測定項目5項目の質問紙に7件法で回答を求めた。

結果 写真毎に美人度・好意度の得点を算出し、得点を基に男女各4枚の顔写真を選択した。写真は便宜的に女性をA1~A4、男性をB1~B4として分析に使用する。

本調査

目的 予備調査で選択された8枚の顔写真の美人度と好意度、パーソナリティ4因子を測定し、美人ステレオタイプの存在とその性差について検討する。

方法 調査対象者である北海道教育大学の学生260名(男性106名,女性137名,無効回答17名)に顔写真8枚を提示し、予備調査同様の美人度・好意度測定項目に加え、戸田(2012)で使用されたパーソナリティ測定項目4因子16項目を刺激人物が女性の場合でも使用できるよう「女らしさ」項目を作成した。計21項目の質問紙に7件法で回答を求めた。

結果と考察

美人ステレオタイプの検証

表1. パーソナリティ項目の因子分析の結果(性 × 刺激人物 = 30 ケース)

| | 異性 | 活動性 | 誠実さ | 女らしさ | 品性 | | 異性 | 男らしさ | 活潑性 | 誠実・知的 | |
|------|----|--------|--------|----------|----------------------|-----|----|--------|--------|-------|-------|
| A1 | 同性 | 元気が娘 | 望ましさ | 女らしさ | | B1 | 同性 | 好青年 | 望ましさ | 男らしさ | 活潑性 |
| | 同性 | 元気が娘 | 親しみやすさ | 大和撫子 | | | 同性 | 誠実・品性 | 男らしさ | 好青年 | |
| A2 | 異性 | 望ましさ | 大和撫子 | 活潑・女らしさ | | B2 | 異性 | 男らしさ | 望ましさ | 品性 | |
| | 同性 | 望ましさ | 大和撫子 | 活潑・女らしさ | | | 同性 | 男らしさ | さわやか | 活潑性 | 望ましさ |
| | 同性 | 大和撫子 | 元気が娘 | 積極性・ユーモア | | | 同性 | 男らしさ | 活潑性・意欲 | 望ましさ | |
| A3 | 異性 | 望ましさ | 女らしさ | 活動性 | 健康・溫和 (男50.0(男1)・男9) | B3 | 異性 | 誠実・品性 | 活潑性 | 男らしさ | |
| | 同性 | 活動性 | 望ましさ | 健康溫和+2 | 女らしさ | | 同性 | 誠実・品性 | 男らしさ | 活潑性 | 無邪気さ |
| | 同性 | 親しみやすさ | 乙女 | 活動性 | | | 同性 | 誠実・品性 | 活潑性 | 男らしさ | |
| | 異性 | 望ましさ | 女らしさ | 活動性 | 純粋さ | B4 | 異性 | 男らしさ | 誠実・知性 | 活潑性 | 育ちの良さ |
| A4 | 同性 | 女らしさ | 親しみやすさ | 活動性 | 純粋さ | | 同性 | 誠実・品性 | 男らしさ | 活潑性 | 露刀・品性 |
| | 同性 | 元気が娘 | 大和撫子 | 積極性・ユーモア | | | 同性 | 誠実・品性 | 男らしさ | 活潑性 | |
| | 異性 | 望ましさ | 女らしさ | 活動性 | | 男平均 | 同性 | 親しみやすさ | 男らしさ | 望ましさ | 積極性 |
| 女性平均 | 同性 | 望ましさ | 活動性 | 女らしさ | | | 同性 | 活潑さ | 男らしさ | | |
| | 同性 | 望ましさ | 女らしさ | 活動性 | | | | | | | |

表1はパーソナリティの因子分析の結果である。得られた因子を基に30ケースそれぞれで美人度を説明変数、好意度を目的変数とした回帰分析、美人度と好意度を説明変数、各パーソナリティ因子を目的変数とした重回帰分析を行った。その結果、類似の因子でも美人度からの回帰が見られるものと見られないものがあるなどケース毎に多くの差異が見られたが、美人度が直接パーソナリティに影響を及ぼしているものと、好意度を媒介して影響を及ぼすものという、従来の美人ステレオタイプの存在が男女や同性・異性に関わらず一貫して確認された。

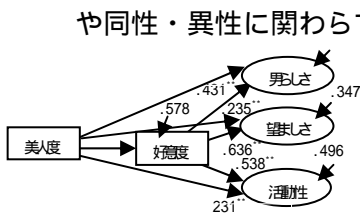


図1. 男性平均に対する美人ステレオタイプ(異性)

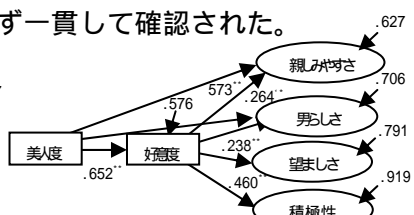


図2. 男性平均に対する美人ステレオタイプ(同性)

性差の検討

美人ステレオタイプの性差を検討するために、図1, 2における「男らしさ」や、「望ましさ」と「親しみやすさ」のように刺激人物ごとに見られた類似のパーソナリティ因子に関して、同性・異性で美人度もしくは好意度からの回帰が共通して見られた組み合わせの偏相関係数を算出し、相関係数に有意な差が見られるかどうか比較を行うために相関係数の差の検定を行った。

その結果、比較を行った35組のうち5組で偏相関に有意な差が見られた。仮説の検討を行うために有意な差が見られた5組を性別ごとに分類すると、同性と異性では同性が評定した場合に大きかったものが2組、異性が評定した場合に大きかったものが3組と、わずかに異性が評定した場合に多く美人ステレオタイプの影響が大きいものが見られたものの、その差はわずかであり、異性が評定した場合に美人ステレオタイプが促進されるという仮説3は明確に支持されたとはいえないであろう。

また、男女で分類した場合は、男性が評定した場合に大きかったものはわずか1組で、女性が評定した場合に大きかったものが4組であった。この結果は、身体的魅力をより重視するとされる男性が評定した場合に美人ステレオタイプは促進されるという仮説2とは全く逆の、女性が評定した場合に美人ステレオタイプが促進されている可能性を示唆するものである。また、これは川西(1993)の研究結果にも反する結果であると考えられるが、なぜこのような結果が本研究で得られたのであろうか。

その原因として考えられるものに好意度の影響がある。今回、有意差が見られた5組は全て好意度を媒介した場合のものであり、美人度からの直接の相関では有意差は見られていない。川西(1993)では身体的魅力を美人度・好意度の2側面に分類せず研究を行っていることを踏まえると、男性が評定する場合は美人度が、女性が評定する場合は好意度の影響が促進され、本研究では後者の影響がより強く表れたとすれば本研究と川西(1993)との相違が合わせて説明できるのではないかと考えられる。

(KOBAYASHI Ryota)

異性愛者への性的指向のカミングアウトが

LGB の自己開示に与える影響と精神的健康への効果

齋藤雅博

キーワード：同性愛・両性愛，カミングアウト，自己開示，精神的健康

問題と目的

LGB(レズビアン,ゲイ,バイセクシュアル)とは,性的指向が同性や両性に向く性的少数者である。LGBは職場・学校・家庭などで,LGBであることを隠す必要や,異性愛者を装う必要があるなど,LGBは感情の操作や抑制を求められており,精神的健康への悪影響が懸念される。

LGBであることは外見からは判断されにくい。そのためLGBは異性愛者に対して自身がLGBであると告げるカミングアウトをする場合がある。カミングアウトは「LGBである」ということを異性愛者に伝達する機能のみならず,カミングアウト前までは開示できなかったLGBであることに起因して生じる感情や,LGBであるために取る行動に関する情報の開示を可能にする機能があると考えられる。また,カミングアウト時には性的指向の開示のみならず,カミングアウト前には開示できなかった鬱積した感情や,恋愛についての開示が行われると考えられる。よって,カミングアウト経験が異性愛者への自己開示量を増加させると考えられる(仮説1)。

また,特定の他者に対して自己に関する本当の情報を言語的に伝達する行動(深田,1998)と定義される自己開示には,個人の精神的健康を向上するための機能や,自分の考えをまとめさせる機能,他者との関係を親密にするといった機能があるとされる(榎本,1997;安藤,1986)ことから,異性愛者に自己開示しているLGBほど精神的に健康であると考えられる(仮説2)。

異性愛者へ性的指向を告げるカミングアウトは,LGBであるために取る行動の一つであるが,有馬・

園田(2010)が指摘するようにLGBのカミングアウトに関する研究は少ない。そこで,本研究では,カミングアウトが自己開示に及ぼす影響と,精神的健康への効果を明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象者

北海道,青森県及び東京都で,セクシュアル・マイノリティに関わりのある団体や,イベントに参加しているLGBを対象に質問紙を配布した。また,インターネットを用いて同様のアンケート調査を行った。トランスジェンダーや性同一性障害と区別するために,生物学的性と性自認が一致しており,かつ性的指向がLGBである調査協力者(質問紙55名,インターネット119名)を分析の対象とした。

質問項目

自己開示はESDQ-45(榎本,1997),孤独感は改訂版UCLA孤独感尺度(工藤・西川,1983),特性不安はSTAI日本語版(清水・今栄,1981)のA-trait項目,他者への信頼感は天貝(1995:1997)の信頼感尺度の,他人への信頼,不信を用いた。フェイス項目として年齢や住居地,性の要素(生物学的性,性自認,性的指向),カミングアウト状況を尋ねた。

結果

仮説1を検証するために,自己開示を目的変数,カミングアウト人数を4つカテゴリに分けたもののダミー変数と性別,収集方法を説明変数としてステップワイズ法で重回帰分析を行った。その結果,カミングアウト人数($\beta=.16, p<.05$),カミングアウト人数($\beta=.24, p<.01$)から自己開示へ有意な正

の標準偏回帰係数が得られた。カミングアウト人数、カミングアウト人数、性別、収集方法は有意ではなかった。

次に、仮説2を検証するために、孤独感、特性不安、他人への信頼、不信を目的変数、自己開示、カミングアウト人数の4つのダミー変数と性別、収集方法を説明変数としてステップワイズ法で重回帰分析を行った。その結果、自己開示から孤独感($\beta = -.41, p < .01$)へ有意な負の標準偏回帰係数が、他人への信頼($\beta = .36, p < .01$)へ有意な正の標準偏回帰係数が得られた。また、収集方法から孤独感($\beta = -.32, p < .01$)へ有意な負の標準偏回帰係数が、他人への信頼($\beta = .28, p < .01$)へ有意な正の標準偏回帰係数が得られた。また、性別から特性不安($\beta = -.21, p < .01$)へ有意な負の標準偏回帰係数が得られた。カミングアウト人数から精神的健康に対する影響は確認されなかった。以上の分析結果のパス図を図1に示した。

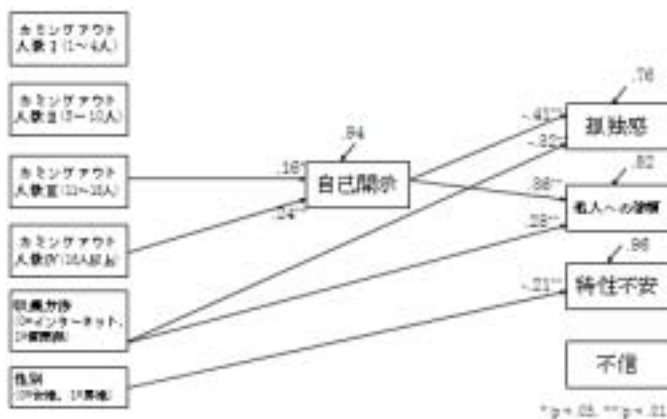


Figure 7 カミングアウト人数、収集方法、性別、自己開示、精神的健康の関係

考察

分析の結果、「カミングアウト人数」「カミングアウト人数」では自己開示量に有意な影響はみられなかったが、「カミングアウト人数」「カミングアウト人数」において自己開示量が多くなること示された。また、「カミングアウト人数」の標準偏回帰係数 β は.16であり、「カミングアウト人数」の標準偏回帰係数 β は.24であることから、カミングアウト人数が多い方が自己開示量が多くなると考えられる。よって、仮説1は一部支持されたといえる。自己開示量を増加させるには、多くのカミングアウト経験を要することが示唆された。

また、自己開示は特性不安、不信については影響を及ぼさなかったが、自己開示が孤独感を抑制し、他人への信頼を高めることが確認され、仮説2は一部支持されたといえる。また、精神的健康に対してカミングアウト人数は直接影響を与えていなかった。孤独感を抑制し、他人への信頼を高める要因として、カミングアウト人数とカミングアウト人数の間に自己開示が媒介することが示された。カミングアウトは「LGBである」という自身の一側面についての自己開示であるが、孤独感や他人への信頼に影響を及ぼすほどの効果はないと考えられる。しかし、カミングアウトにはLGBであることに関係する自己の情報の開示を可能とし、自己開示を増やすことができる機能があると考えられる。

また、自己開示以外の要因では、性別が特性不安に、収集方法が孤独感と他人への信頼に影響を与えていた。特性不安は、女性よりも男性の方が低いことが示された。性的少数者かつ女性特有の困難が特性不安に影響を及ぼしていると考えられる。収集方法では、インターネットでの回答データよりも質問紙での回答データの方が孤独感が低く、他者への信頼が高いことが示された。インターネットでは都会のみならず地方からの回答を集めることができたが、質問紙ではLGBの活動団体が存在するいくつかの都道府県からしか回答が得られなかった。そのため、収集方法による影響がみられたと考えられる。

以上より、カミングアウトはより多くの自己開示をするために必要であり、カミングアウト後に十分に自己開示することが孤独感を減少させ、他人への信頼を向上させることが示唆された。

(SAITO Masahiro)

青年期の親子関係の良好さに対親行動が与える影響

-家族機能と社会的スキルの側面-

篠田侑紀

キーワード：親子関係，対親行動，家族機能，社会的スキル

問題と目的

青年期は、ファミリーライフサイクル第4・5段階の家族状況にあり、親子関係を新しく構築すること、親子関係を成人同士の関係に発達させることが発達課題である(岡堂, 1984)。しかし近年では成人しても独立しない子どもや、自立した成人として子どもを見ることができない親の存在から、発達課題を達成できず、良好な親子関係を築けないケースが多く問題視されている(若島, 2009)。

対親行動

対親行動とは子供の親に対する行動を指し、青年期の対親行動は親子関係の良好さを促進するといわれる(迫田ら, 2007)。また、徳田・柴田(2005)は、青年期は親と別居して生活することが多いため、親子がお互いを尊重する気持ちが強まるとしている。別居という居住形態と対親行動はそれぞれ親子関係の良好さに影響するとされているが、相互の関連は明らかではない。

家族機能

家族機能とは凝集性・適応性・コミュニケーションの3次元から成る家族関係を構築する能力を指す。青年期の子をもつ家庭では家族機能が十分に働くと、過度な情緒的癒着がなく親子で意思を尊重し、家族内のコミュニケーションが円滑になる(小野・坂中, 2007)とされている。家族機能は子どもの自立を促し、さらに子どもの自立から親子が成人同士の関係になるとされているが、家族機能が直接成人同士の関係とつながることは確認されていない。

社会的スキル

社会的スキルとは対人関係における学習可能な適応能力であり、社会的スキルを磨くと対人関係にお

けるコミュニケーションは円滑になる。迫田ら(2007)は子ども自身の社会的スキルが対親行動に影響を与えるとしており、親子関係の良好さにも影響していると示唆した。しかし影響を与える社会的スキルについて詳しく言及はされていない。

方法

予備調査

質問紙調査により対親行動尺度を作成。得られた項目をKJ法で分類し、18項目の尺度を作成した。

本調査

質問紙調査を実施し、函館市内の青年期の学生から回収した。尺度は、家族機能尺度(草田・岡堂, 1993)20項目、予備調査から作成した対親行動尺度18項目、KISS-18の18項目、フェイス項目として年齢や居住形態、父母それぞれとの関係の良好さをたずねた。

親子関係の良好さについては様々な先行研究があるが、本研究では子どもの日々の対親行動に焦点をあて研究を行ったため、日常的に感じている親との良好さを重要と考えたため、水野(2006)を参考に、子ども自身が考える良好さとして分析を行った。

調査協力者は18~23歳の276名であった(男性88名、女性182名/母と同居101名、母と別居166名、父と同居72名、父と別居177名)。

結果と考察

各尺度を構成するため主因子法・バリマックス回転で因子分析を行った。その後階層的重回帰分析を行い、仮説の検証を行った。

因子分析

家族機能尺度は、「密着」「必要性」「問題解決」「尊重」

で構成されていた(累積寄与率 54%)。

父への対親行動は、「コミュニケーション」「衝突回避」「反発行動」で構成されていた(累積寄与率47%)。

母への対親行動は、「意思疎通コミュニケーション」「奉仕・礼儀コミュニケーション」「衝突回避」「反発行動」で構成されていた(累積寄与率51%)。

KISS-18は、「対話行動」「意思伝達」「感情処理」「適応性」で構成されていた(累積寄与率48%)。

階層的重回帰分析

各因子が父・母の良好さに与える影響を検証するため、父・母への良好さ得点を目的変数(緑)、各因子(青)と性別(赤)[男性=0, 女性=1]・居住形(橙)[同居=0, 別居=1]をモデル1にステップワイズ法で、モデル2には性別と居住形態、各因子の交互作用項を説明変数として強制投入法を用いて追加投入した。

父との関係の良好さ

父との関係の良好さに対して、「コミュニケーション」が促進、「反発行動」が抑制する結果を示した。居住形態との交互作用項については、別居群の「反発行動」が良好さを促進し、「適応性」が促進することが示された(図1)。

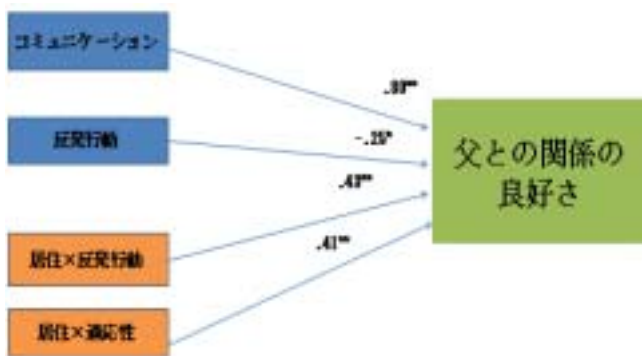


図1 父との関係の良好さとの関連

まず反発行動については、本来は関係の良好さが抑制されると考えられたが、別居することで物理的な距離が生まれたため、コミュニケーションの1つとなり父との関係の良好さが促進するかと考えられる。また、別居群の「適応性」が父との関係の良好さを促進する結果は、人に対してすぐに謝ることができる社会的スキルであるため、常に顔を合わすことがない場合素直に謝ることが多くなり、父との関係の良好さを促進させるのではないかと考えられる。

母との関係の良好さ

母との関係の良好さに対して、「意思疎通コミュニケーション」が促進、「反発行動」が抑制する結果を示した。性別との交互作用項については、女性の「意思疎通コミュニケーション」が良好さを抑制し、「反発行動」と「問題解決」が促進させることが示された。居住形態との交互作用については、別居群の「奉仕・礼儀コミュニケーション」が良好さを促進し、「衝突回避」は抑制することが示された(図2)。



図2 母との関係の良好さとの関連

まず性別との交互作用項である家族機能因子「問題解決」が母との促進することから、女性は家族の問題を母と語り合うことが可能な関係であり、良好な関係だと自覚したと考えられる。女性が母と家族の問題に対して本音で話し合えることは関係の良好さにつながるのではないかと考えられる。対親行動が父・母との関係の良好さに与える影響は、居住形態・性別も関係し、促進や抑制を及ぼす。例えば「反発行動」そのものは関係の良好さを抑制すが、女性の調査協力者が「反発行動」をすると良好さは促進される。

以上のことから、青年期において父・母ともに良好さを促進していた因子は「コミュニケーション」に関する因子であった。日々の生活の中で親と関わりをもつことは、良好な関係を築くうえで重要なことであると考えられる。また、性別を考えると、女性のみ母に対して良好さを促進・抑制する結果が確認された。

(SHINODA Yuki)

小学生における学習習慣とウェルライフの関連

高村 亜希子

キーワード：学習習慣，自尊感情，学校内不安，ウェルライフ

目的

子どもたちは一日の大半を学校で過ごしている。荒木(2003)では、学校での不安やストレスは、適度であると子どもの発達を促進するが、それらが過度になると学習は抑制・阻害され、やがては学力低下や、学習や人間への無関心につながる。不安やストレスを克服する力がつけば次のステップのバネになるが、それらが独走すると様々な問題を引き起こすことになる、と述べている。このように、少なくとも有害となり得るような不安やストレスは軽減し、子どもたちが学習に臨みやすい環境にすることが大切である。さらに、子どもたちが自分自身でストレスを軽減できる対処方法を身につけさせ、耐性を養うことも重要である。そのためには、学校における不安やストレスを客観的にアセスメントすることが、児童生徒の健康や学力の向上にとって、必要不可欠である。

学校生活の楽しさとその規定要因

小・中学生における学校生活の楽しさとその規定要因について古市(1997)は、小学生は友人や教師との関係、中学生においては友人との関係の良し悪しが学校生活享受感情(学校生活における充実感)に大きな影響を及ぼしていることを明らかにした。また、高校生の学校生活に対する嫌悪感や登校忌避感情についての荻間澤・河村(1999)の研究では、登校忌避感情に対して特に学習への適応の寄与率が高いことが示された。

学力調査

2011年のTIMSS調査で、各教科について「好き」「楽しい」について、「強くそう思う」「そう思う」「そう思わない」「まったくそう思わない」の4件法で回答を求めている。小学生と中学生どちらにお

いても、「強くそう思う」という回答ほど得点の平均点が高くなっていることが示されている。また、「自信がある」という児童生徒ほど高い点数であることも明らかである。この調査から分かるように、学習に対して前向きな考えを持っている児童生徒ほど高い得点を取ることができている。

2008年の全国学力・学習状況調査では子どもたちの学習意欲や学習習慣・生活習慣の状況についても併せて調査を行っている。児童生徒質問紙の項目は「生活・学習習慣」「関心・意欲・態度」「授業」の3つの領域に分けられ、それぞれと各教科の正答率との相関関係について分析している。その結果、各領域と正答率の間に正の相関がみられた。このように、基本的な学習習慣や生活習慣の確立と正答率には一定の相関関係があることがうかがえる。学習習慣や生活習慣を改善することで、学力の向上をねらえる可能性もあると考えられる。

本研究では、小学生における学習習慣と学校生活充実感(ウェルライフ)の関連を明らかにすることを目的とする。仮説は以下の通りである。

仮説 1：学習習慣得点の高い子どもは、学校内不安得点において低い数値を示す。

仮説 2：学習習慣得点の高い子どもは、自尊感情得点において高い数値を示す。

方法

1. 調査対象者 函館市内の小学生 191名(3年生 46名, 4年生 45名, 5年生 52名, 6年生 48名)

2. 調査内容 質問紙を実施した。回答はすべて3件法で行った。

(1)学校生活充実感(荒木、2003)

学校内不安尺度

自尊感情尺度

(2)学習習慣調査(荒木、2003)

結果

1. 各尺度の信頼性、各尺度の下位尺度構成の確認

各尺度に対して、主成分分析・バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、学校内不安尺度は 3 因子($\lambda=.752$)、自尊感情尺度は 4 因子($\lambda=.743$)、学習習慣調査は 1 因子($\lambda=.809$)になった。

2. 学習習慣と学校内不安と自尊感情の関連

3 つの尺度の相関係数を算出したところ、学校内不安と自尊感情の間に負の相関がみられた($r=-.511$, $p<.01$)。また、学習習慣と学校内不安では相関がみられなかった($r=-.096$, $n.s.$)が、学習習慣と自尊感情では正の相関がみられた($r=.300$, $p<.01$)。

3. 学年の違いと学習習慣、学校内不安、自尊感情の関連

学年を独立変数とし、学校内不安と自尊感情と学習習慣を従属変数とした 1 元配置の分散分析を行った。その結果、学校内不安において有意差がみられた($F(3, 171)=3.61$, $p<.05$)。多重比較を行った結果、3 年生と 5・6 年生の平均値に有意な差がみられた($p<.05$)。

考察

本研究結果から、仮説を検証する。まず、「仮説 1: 学習習慣得点の高い子どもは、学校内不安得点において低い数値を示す。」を検証したところ支持されなかった。これは、前述したように、学習面で満足できていなくとも、「運動能力」や「人間関係」等の得意分野で満足できていれば、学校内不安は抑制されるからであると考えられる。古市(1999)の研究でも、小学 5 年生から中学 2 年生までの男女全てにおいて友人関係が学校生活の楽しさに影響を与えていることが明らかにされた。よって、学習面の不満足を他の分野でカバーできれば、不安は低減することができると思われる。例えば、委員会で仕事を持たせたり、部活動で仲間をつくったり等、教師は学校生

活の中で児童の積極的な活動を促し、様々な分野で自分の居場所や役割を実感できるよう、支援・指導していく必要がある。

次に、「仮説 2: 学習習慣得点の高い子どもは、自尊感情得点において高い数値を示す。」を検証したところ、「自己価値観」と「幸福感」因子において仮説は支持された。2008 年の全国学力・学習調査でも、基本的な学習習慣や生活習慣の確立と正答率には一定の相関関係があることが示唆されており、古市(1999)でも学業適応と学校の楽しさには一定の相関関係があることが明らかにされている。よって、学習習慣が確立され、学業成績に満足できている児童は自尊感情が高くなると言える。これにより、教師は児童の学習習慣の確立を目指し、日常的に指導をしていくことが重要であると考えられる。

性別の違いと学習習慣、学校内不安、自尊感情の関連について、男子では「対教師不安」が「自信」と相関がみられたが、女子ではみられなかった。これは、学校生活の楽しさの規定要因における教師適応の寄与率が、女子よりも男子の方が高いという古市(1999)の知見と一致している。小学校 5 年生、6 年生、中学校 1 年生、2 年生を対象とした研究で、小学校 5 年生と中学校 1 年生において男子の教師適応の寄与率が有意に高かった。

最後に学年の違いと学習習慣、学校内不安、自尊感情の関連についてであるが、学校内不安得点において 3 年生よりも 5・6 年生の方が有意に高かった。この結果から、学年が上がるにつれて、学校内不安が高くなっていくことが推測できる。その理由として、学年が上がっていくにつれて友人関係も複雑になっていくため、純粋に学力や学習面のみの問題だけではなく、友人関係の問題も授業時に何かしらの形で影響を与えているのではないかと考える。

(TAKAMURA Akiko)

マキアヴェッリ『君主論』の考察

- 現代におけるリーダーの在り方 -

田尻 優祐

キーワード：君主論、現代、リーダー

問題と目的

『君主論 (Il Principe)』とは、ニコロ・マキアヴェッリ (Niccolò Machiavelli) によって 1513 年に執筆された政治書である。『君主論』の中でマキアヴェッリは、歴史上の様々な君主や君主国を分析し、君主とはどう在るべきものなのか、君主として権力を獲得し、それを保持し続けるにはどのような力量や気質が必要となるのか、などということを全 26 章の中で論じている。この 26 章は一般的に 4 つの部分 (. 国の分類とその征服と維持の手段、 . 攻撃と防衛に関する軍事的側面、 . 君主の資質、 . 当時のイタリアの危機的状況の分析、更にこの危機を乗り切る君主の待望論) に大きく分かれている。

本論文では、この『君主論』の中から上の分類でいう ~ について分析し考察するとともに、その内容を踏まえた上で現代におけるリーダーにはどのような能力が必要か、また集団の中でどのようにして在るべきか、ということについて考察していた。

内容

第 1 章においては、『君主論』の第 1~11 章に記されている、君主の国の統治の手段について見てきた。第 1 章では、君主論の中でマキアヴェッリの分類した領土の形態と、それぞれに応じた領土の治め方に着目し、それを現代的に当てはめることで、現代におけるリーダーは、どのような組織・集団をどのようにしてまとめていくべきなのか、というこ

とについて考察した。倫理的側面などから、現代においてはマキアヴェッリのいう旧君主の血統を根絶やしにしたり、思い通りにならない民衆を消すなどといったことは考え難いが、例えば、企業買収の際、もともとのその企業の役員を訴追し、既存のルールを維持することで、上手く企業を統治するということなどは、現在においても行われている。そして現代におけるリーダーはそのようなやり方もあるということを入念に入れておくべきであろう。以上に挙げた方法は、スティーブ・ジョブズが NeXT 社に所属していた頃、映像制作会社ピクサーを買収した際に実際に使った手法である。スティーブ・ジョブズは前体制下で実質的なリーダーだった者をリストラや配置転換するなどして、権力を根絶する一方で、残りの方々の仕事のやり方は尊重し、一緒に働いた。そうすることで、彼はピクサーの新しいリーダーとして位置付けられ、後にピクサー社は、トイ・ストーリーを公開するなど、世界的に有名な企業の一つに成り上がった。

第 2 章では、『君主論』の第 12~14 章に記されている、国の軍事的な側面についての在り方について見てきた。君主の持つべき武力に対するマキアヴェッリの考えを踏まえて、現代においてリーダーはどのような戦力を扱い、またそれらを育てあげていくべきなのか、ということについて考察した。マキアヴェッリは、自国軍を持たなければならないということ強く訴えていて、他の軍隊は、「傭兵軍および外国支援軍は役に立たず、危険である。」とした。現

代において、賃金などの関係から正社員より派遣社員やアルバイトを多く雇い、店舗のほとんどをアルバイトなどで経営している企業が多く見られる。しかし、マキアヴェッリの考えによるとそれは責任感などの関係から、何か大きな問題が起こった際に危険であるので、やはり多くをアルバイトなどでまわすやり方は危険である。もし様々な要因からそれを回避することが不可能だった場合、現代におけるリーダーはそれが危険だということを認識しておかなければならない。

第3章では、君主論における、君主の資質、理想の君主像について見てきた。そしてそのようなマキアヴェッリの考えを踏まえ、現代におけるリーダーはどのような考えを持ち、どのような判断を下し、またどのようにして在るべきことが理想的であるのか、ということについて考察した。現代におけるリーダー論では、リーダーは周りから愛される存在であるべきであり、恐れられることは正しいリーダーシップではないと敬遠されがちである。しかし、マキアヴェッリの考えによると、恐れという感情がなければ、集団は結束と秩序が成り立たないので、リーダーは冷酷な面を持たなければならない。このようなマキアヴェッリの考えも踏まえて、現代におけるリーダーはただ愛されるだけではなく、時には恐れの対象となるべき場合もあり得る、ということを入念に入れておくべきだろう。

次に、現代のリーダー論では、信義・信頼性は、リーダーにとって欠かすことのできない能力とされがちである。しかし、マキアヴェッリは、すべての人間がよい人間であるわけではないので、信義を守る必要がない場合や、守ることで自分にとって不利益が生じる場合、必ずしもそれを守る必要はないとした。マキアヴェッリの考え方を踏まえ、現代におけるリーダーは、信義・信頼性をできる限り守ることはもちろんとして、守る必要がない場合や、不利益が生じる場合、信義は必ずしも守る必要のあるものではない場合があるということ覚えておきたい。

君主論でのマキアヴェッリの有名な言葉の一つに「加害行為は、一気にやっ

てしまわなくてはいい」というものがある。ではなぜ加害行為は、一気にやっ

てしまわなくてはいいのか、マキアヴェッリは「ある国を奪いとるとき、征服者はとうぜんやるべき加害行為を決然としてやることで、しかもそのすべてを一気呵成におこない、日々それを蒸し返さないことだ。さらに、蒸し返さないことで人心を安らかにし、恩義をほどこして、民心を掴まなくてはいい。そうすることで、人にそれほど苦汁をなめさせなければ、それだけ人の憾みを買わずにすむ。これに引きかえ、恩恵は、よりよく人に味わってもらうように、小出しにしてやらなくてはいい。」と述べている。このマキアヴェッリの考えを踏まえ、現代におけるリーダーは、他人に被害を与えなければならないときは、その期間を長引かせてはならず、一気にやっ

てしまい、その他に恩恵を与えることなどで、手早く被害を与えたことを忘れさせなければならないのである。また恩恵は逆に長期間で小出しにして、恩恵を与えていることを忘れさせてはならない。このマキアヴェッリの考え方を現代的に当てはめてみる。例えば大手企業の人事担当者がいたとしよう。その大手企業はあまり業績が芳しくなく、一年間に365人リストラしなければならない。この場合、最も悪いリストラの方法は、一年間にわたって、一日に一人ずつリストラしていくことだろう。こうすれば社内では、今日は誰がリストラされるのか、といったような不安や不満から、社員たちの労働意欲は地に落ちてしまうだろう。ここで、逆に、最も良いリストラの方法は、最初の一日に365人リストラした後、その後は誰も解雇しない方法である。そして、残りの一年間はその分社員の待遇を厚くし、リストラがあったという衝撃を和らげる。こうすることで、悪いことは最初の一日で終わり、残りの一年間は社員にとって良いことが続くことになる。以上のように、やむを得ず、人に被害を与えなければならないときは、一気にすべきである、ということ現代におけるリーダーは頭に入れておくべきだ。

以上に挙げたようなことを現代におけるリーダーは、マキアヴェッリの『君主論』から学ぶべきだろう。

音楽による気分誘導効果の検証

中沢美由子

キーワード：音楽、気分誘導、多面的感情状態尺度

目的

音楽を聴取することで気分に変化が起きることは経験的によく知られており、音楽を聴いた後にその曲の持つ感情的性格にほぼ即した気分が生じることが明らかになっている(中村,1983)。また、松本・廣川・堤・橋本(2012)は、音楽聴取者の気分状態が不安な状態である場合、明るく活発な音楽によって気分が改善されると報告している。これまで音楽と気分に関する研究では1度のみ気分誘導を行う研究がほとんどであったが、本研究では気分誘導を2度行い、1度音楽で変化した気分を再び音楽によって正反対の気分へ誘導することが可能であるか検討する。同時に、1度目の誘導で変化した気分の幅と2度目の誘導で変化した気分の幅を比較することも目的とする。また、我々が普段最もよく聴くとされている日本のポップスには歌詞の存在が必要不可欠である為、本研究では日本語詞で歌唱されている曲を対象として検討をしていく。

仮説は以下の通りとする。

仮説 1度目の音楽聴取で暗い曲(以下N曲)を聴くとマイナスの気分誘導され、2度目の音楽聴取で明るい曲(以下P曲)を聴くとプラスの気分誘導される。

仮説 1度目にP曲を聴くとプラスの気分誘導され、2度目にN曲を聴くとマイナスの気分誘導される。

仮説 正反対の気分状態からより、音楽聴取前の気分状態から誘導を行うと、気分誘導効果が高まる。

予備調査

目的

本実験で用いる妥当な感情状態評定尺度を作成することを目的として行った。

方法

実験参加者 本学の大学生 74名(N曲条件 37名,P曲条件 37名)であった。

実験材料 寺崎・岸本・古賀(1992)の多面的感情状態尺度のうち、肯定的感情尺度 15項目、否定的感情尺度 15項目の計 30項目、5件法(「1:全くあてはまらない」から「5:非常にあてはまる」)で構成された質問紙を用いた。

実験手続き 最初に、今まで聞いたことのある曲で自分が明るい曲、又は暗い曲だと考える曲を挙げてもらった。次にその曲を聴いた後に起こりうる感情を5件法で回答させ、今後の実験で用いる尺度を作成した。

結果・考察

N曲条件、P曲条件ともに各感情状態項目の平均値と標準偏差、「0:全くあてはまらない」と回答した人数を算出し、「0」の回答数が半数未満の項目を採用した。その結果、N曲条件、P曲条件それぞれ7項目と、2つの条件に共通して「0」の回答数が少ない4項目を加え、本実験で用いる尺度は快・不快尺度各7項目、嗜好尺度4項目の全18項目に決定した。

予備調査

目的

本実験の音楽聴取の際に使用する楽曲を選ぶことを目的として行った。

方法

実験参加者 本学の大学生合計40名であった。

実験材料 N曲とP曲各4曲と、松本(2002)の研究で用いられた、10対の形容詞対から成る質問紙を用いた。

実験手続き 本実験で使用する楽曲を1人4曲、1曲につき2度ずつ繰り返し聴取した。2度目の再生

時には曲に合わせてリズムを取りつつ聴取するよう教示した。1 曲を聴くごとに、質問紙で各楽曲の評価を求めた。

結果・考察

プロフィール曲線を作成し、各項目において最も突出し、かつ各項目における平均点が最も高い 2 曲と低い 2 曲を採用し、N 曲候補と P 曲候補について t 検定を行った結果有意な差が見られた ($t(478)=53.73, p<.05$)。よって候補曲 4 曲を本実験で用いる曲に採用した。

本実験

目的

2 度にわたる音楽による気分誘導法の効果を検討することを目的として行った。

方法

実験参加者 本学の大学生の合計 113 名(NP 条件 48 名、PN 条件 65 名)であった。

実験材料 予備調査にて妥当と評価された 4 曲と、感情状態評価項目を用いた質問紙を使用した。

実験手続き まず質問紙を用いて感情状態を測定し、1 度目の音楽誘導として N 曲を 2 回聴取した。その後再び感情状態を測定し、P 曲を 2 回繰り返し聴取した。最後に実験参加者の気分状態を測定し、実験は終了した。実験のパターンは、上記のネガポジ条件を含む、N 曲 ・ と P 曲 ・ を組み合わせた 4 パターンであった。

結果と考察

音楽聴取前の全回答に対して因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った結果、「晴れやか」因子、「不安」因子、「ときめき」因子、「無気力」因子の 4 つが抽出された。4 因子による累積寄与率は 69.72%であった。また、各条件の聴取前・聴取後・聴取後で得られた平均値について対応のある t 検定を行った。(Table1,2)

| NP 条件 | N 曲聴取前後 t(47) | P 曲聴取前後 t(47) |
|-------|---------------|---------------|
| 晴れやか | 3.90(p<.05) | 7.55(p<.05) |
| 不安 | .68 (n.s.) | 5.78(p<.05) |
| ときめき | 1.67 (n.s.) | 3.53(p<.05) |
| 無気力 | 1.00 (n.s.) | 4.61(p<.05) |

Table 1. NP 条件における音楽聴取前後の t 検定結果

| PN 条件 | P 曲聴取前後 t(65) | N 曲聴取前後 t(64) |
|-------|---------------|---------------|
| 晴れやか | 6.51(p<.05) | 9.27(p<.05) |
| 不安 | 4.74(p<.05) | 4.60(p<.01) |
| ときめき | .87 (n.s.) | 1.47 (n.s.) |
| 無気力 | 6.82(p<.05) | 5.64(p<.05) |

Table 2. PN 条件における音楽聴取前後の t 検定結果

また、同じ性格を持つ曲同士で曲を聴く順番によって感情状態の変化の幅に差が出るのかを調べるため、t 検定を行った。まず、N 曲を聴取したことが原因で動いた感情の幅の差を調べる為、NP 条件における N 曲聴取後の得点から聴取前の得点を引いた得点と、PN 条件における N 曲聴取後の得点から P 曲聴取後の得点を引いた得点について t 検定を行った。結果、「晴れやか」因子、「不安」因子、「無気力」因子において有意な差が見られた(「晴れやか」 $t(91)=4.13, p<.05$ / 「不安」 $t(91)=2.26, p<.05$ / 「無気力」 $t(91)=3.36, p<.05$)。最後に、PN 条件における P 曲聴取後の得点から聴取前の得点を引いた得点と、NP 条件における P 曲聴取後の得点から N 曲聴取後の得点を引いた得点について t 検定を行った。結果、「晴れやか」因子と「ときめき」因子において有意な差が見られた(「晴れやか」 $t(112)=2.89, p<.05$ / 「ときめき」 $t(112)=2.41, p<.05$)。

本実験では、暗い性格を持つ曲、又は明るい性格を持つ曲を聴取すると曲の持つ感情的性格に沿った気分へと誘導することができた。よって仮説 1 は支持された。次に、同じ性格を持つ曲間において、聴取の順番によって感情状態の変化の幅に一部の因子で差が見られた為、仮説 2 は一部支持された。「晴れやか」因子については、真逆の感情状態から曲を聴取することで、著しい増減が見られた。このことから、「晴れやか」因子は感情状態を表す 4 因子の中でも動きが活発であり、直前に聴いた曲の感情的性格の影響を受けないが、反動的に気分誘導の幅の伸びしろ、あるいは振り幅が大きくなったことが示唆された。そのため、気分転換を目的とした音楽聴取の際は「晴れやか」因子の動きに注目をして選曲、聴取することが有効的であることが考えられる。

(NAKASAWA Miyuko)

民意を反映させるにはどのような施策が有効か

原朋子

キーワード：選挙、民主主義、地院家若美

はじめに

著者がこのテーマを選択したきっかけは、東京都青少年健全育成条例が改正され、著者の愛読していた、『主将！！地院家若美(ちいんけわかみ)』という漫画が打ち切りになってしまったことにある。表現の自由を奪い、漫画を打ち切りにし、読者を悲しませる法律が、反対意見があったにもかかわらず、東京都議会の意見だけで施行されていいのだろうか。このような怒りから、日本国民の意見(民意)は果たして政治に反映されているのだろうかという疑問が常に浮かぶようになったのである。

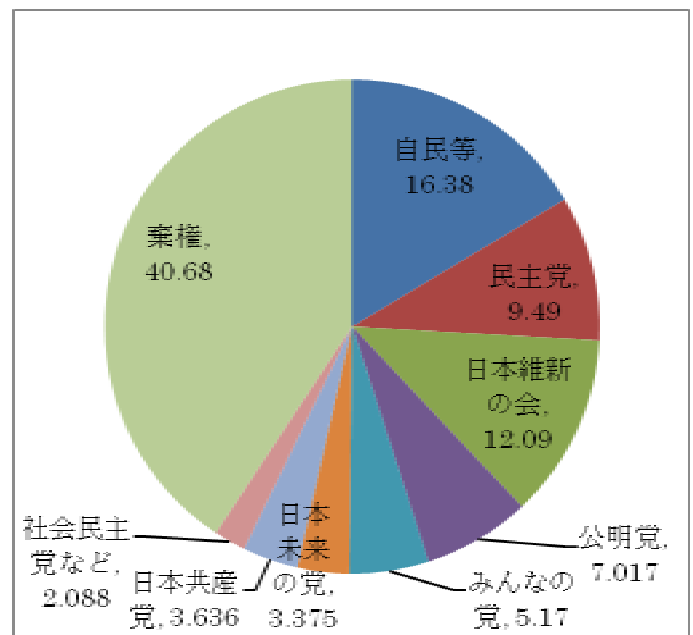
1. 第46回衆議院総選挙の結果は日本国民の民意なのか

2012年12月16日、第46回衆議院総選挙を機に政権が野田義彦首相から現安倍晋三政権に移った。この選挙は2011年3月11日の東日本大震災後初の総選挙であるとともに、政権与党が民主党から自民党へ移った選挙でもあった。かなり、大きな意味を持っていた選挙であるべきはずなのだが、投票率は59.32%と衆議院選挙だけで見ると戦後最低の低さであった。そして、前回の選挙(69.28%)よりも10%程投票率が低いのである。投票率が低い原因で通常考えられる主なものは、選挙制度、マスコミの世論誘導、政治的関心の程度などが考えられる。また今回特有の主な原因は、政党の乱立、争点の多さ、12月という時期、悪天候、震災後初めてだったため、被災地での投票環境の悪化のため投票率が下がったことなども挙げられる。

与党に返り咲いた自民党を中心にみていくと、今回の自民党の得票数は1662万4457票であり、前回

の総選挙の1881万217票よりも218万5760票も少ないのである。しかし、席数は294議席で前回の119議席よりも175席も多いのである。294議席というのは、総議員数480議席中の61.25%である。この294議席は単独で絶対安定多数(委員会法審議が通り、議会で法案を出すことが出来る)の269議席を超えている。また、公明党の31議席を合わせると325議席で総議員数中の67.71%であり、3分の2以上を越えているのである。しかし、自民党の得票率は27.62%であり、有権者数を100%とした場合は、16.38%である。つまり、得票率よりもはるかに多い議席数を自民党は手にしているのである。

表1 有権者数を100%としたときの各党の得票率



2 . 民主主義政治への考察

日本は民主主義を取り入れているが、それは最善の政治なのであろうか。

かつて、アテネでは民主政という市民が行う政治体系であったが、欲望ばかり追求する衆愚政治となってしまった。そこでプラトンは賢者政治と言う少数の賢者による政治体系を提唱した。しかし、賢者が誰かを決めるのは結局我々なのである。

現在、日本で行われているものは自分の支持政党に一票投ずるという形を取っているが、筆者は政党を選ぶのではなく、政策を選ぶことが出来る投票制度にすべきだと考えている。なぜならば、第 47 回衆議院選挙では北海道自民党は TPP(環太平洋戦略的経済連携協定)に反対の立場をとっていたが、安倍晋三は TPP の参加表明を行ったからである。これでは、何のために投票を行ったのか分からなくなってしまう。

このような矛盾を避けるためにも、政策ごとに投票が行える制度を確立すべきである。しかし、現段階ではそれよりも、60%を切っている投票率を上げることを優先すべきである。制度を変えても投票率が低いままであれば、意味をなさないからである。

3 . 投票率向上のための制度

では、投票率を上げるためにはどのような制度が必要なのか。筆者が最も参考になると判断したオーストラリアをもとに考察した。

オーストラリアでは、選挙は国民の権利であるとともに義務としても扱われている。

投票行為が義務であること、投票を支える制度が備わっていること、義務を怠る者への罰金制度があること、それにより投票率が 90%近くを記録していること、候補者に優先順位をつけることが出来ること、以上の点から理想的だと判断した。日本にも郵便で出来る投票制度が存在しているが、身体障害者手帳・戦傷病者手帳を持っている者に限られている。

結論

平成 26 年現在、日本の与党は自民党であり、議席数も 3 分の 2 以上と圧倒的数を誇っている。

しかし、自民党の得票率は決して議席数ほど高いとは言えないのである。これは民意を反映している議会となっているといえるのだろうか。筆者には投票率が低ければ低いほど、少数にしか支持されていない政党でも、独裁に近い政治を行えることの証明の様に思える。

そもそも、民意は必要なのか。民主主義政治には古代の哲学者が衆愚政治になる恐れがあると批判を行っているが、筆者は必要だと考える。なぜならば、いつ現れるか分からない賢者を待つことや、そもそも誰が賢者を決めるのかということよりも、国民が賢者になるように努める方が現実的だからである。

民意を反映するものとして、選挙が我が国では行われているが、投票率が低いと民意を反映していると言えない。従って、筆者はオーストラリアに見られる義務投票制を日本にも導入すべきだと考える。義務投票制にも批判される点はあるが、我々が国民主権の民主主義政治を行っている以上政治について考えることは必須である。問題は、善良な国民について考えられない政治が行われることと、投票率が低くなることにより組織票の割合が多くなることである。従って、義務投票制にするべきである。

以上より、民意は必要であり、民意を最大に反映するため義務投票制にするべきである。

参考文献

岡崎晴輝・木村俊道 編 『はじめて学ぶ政治学 古典・名著への誘い』 ミネルヴァ書房 2008

武田いさみ・森 健・長野隆行 編 『オーストラリア入門 第 2 版』 東京大学出版会 2007

総務省 ニュース一覧 投票制度 郵便等による不在者投票制度について

http://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/news/touhyou/youubin/youubin01.html

(HARA Tomoko)

大学生におけるふれ合い恐怖的心性者の親しい友人に対する意識

平井志愛

キーワード：対人恐怖心性，ふれ合い恐怖的心性，友人に対する感情，友人に求める特性

問題と目的

近年，ニートやフリーター，引きこもりなどが社会問題となっている。これらは思春期・青年期において多発する発達現象であり，その心理・社会的要因として対人関係の不全が大きな役割を果たしているのではないかと考えられている（厚坊・笠井，2005）。そんな中，日本では対人恐怖症が多く見られる。しかし，病的水準には及ばないまでも，健常な一般青年において対人恐怖心性を有する者が普遍的に存在している。さらに，現代日本の大学生世代の青年に特徴的に見られる対人恐怖の新しい型として，「ふれ合い恐怖」が増加していることが明らかにされた（山田ら，1987）。これまでの対人恐怖は，人と人が顔見知りになる場面で発症するが，ふれ合い恐怖は，対人関係がより親密になる場面において発症するとされる。これもまた，ふれ合い恐怖的心性を有する者が普遍的に存在する。

対人恐怖心性に関する先行研究では，相沢（2002）による自己愛との関連，久保（2000）や大久保（2012）による親子関係との関連の研究などが行われてきた。一方，ふれ合い恐怖的心性に関する先行研究でも（福井，2001，2003，2007）や（岡田，2011）による自己愛との関連の研究などが行われてきた。

これらの先行研究は，他者との関係において否定的に考えるものや，親しくない人や初対面の相手との場面想定が多い。しかし，対人恐怖心性が高くてもコミュニケーションをとろうとすることや，聞き手としてのスキルが長けていることが示された（渡部，2012）。また，対人恐怖症者は友人ができないという事例が多く取り上げられているが，そのほとんどが発症する以前は友人がいたケースが多い（内沼，1990）。つまり，対人恐怖心性やふれ合い恐怖的心性を高く有する者でも，今まで一度も友人がいなかった場合は少なく，親しいと思える友人が一人はいるのではないかと考えられる。そこで本研究では，不安を感じなかなか友

人ができない状況の中での親しい友人への意識を検討することとし，より親密な関係を築くことに困難を感じるふれ合い恐怖的心性に焦点を当て，ふれ合い恐怖的心性と親しい友人に対する意識を検討することを目的とする。

方法

調査対象者

北海道の国立大学に通う大学生 204 名が対象とされた。

調査時期

2013年7月から8月にかけて実施された。

調査内容

フェイスシートで学年，年齢，性別を尋ねた。

(1)ふれ合い恐怖的心性：岡田（2002）のふれ合い恐怖的心性尺度を使用した。26項目5件法で回答を求めた。

(2)親しい友人の有無：親しいと思える友人がいるかを尋ね，はい/いいえで回答を求めた。また，その親しい友人が今現在いるのか，過去にいたのかの記入も求めた。

(3)親しい友人との関係：榎本（2003）の親しい友人に対する感情尺度を使用した。具体的に一人を想定するよう求め，15項目6件法で回答を求めた。

(4)親しい友人に求める特性：並川ら（2012）のBigFive尺度短縮版を使用した。「あなたが親しくなりたいと思う人はそのような特徴をもっている人か」と尋ね，29項目7件法で回答を求めた。

結果

各尺度間の関連を調べるために，ふれ合い恐怖的心性尺度，友人に対する感情尺度，BigFive尺度短縮版の相関分析を行った。その結果は表1の通りである。

表 1 下位尺度間の相関係数(N=191)

考察

| | M | SD | 対人退却 | 関係調整不全 | 信頼不安定 | 不安・懸念 | 独立 | ライバル意識 | 葛藤 | 情緒不安定性 | 外向性 | 開放性 | 調和性 | 誠実性 | |
|-----------|-------|------|------|--------|--------|--------|--------|----------|--------|---------|----------|----------|----------|----------|------|
| ふれ合い恐怖的心性 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 対人退却 | 22.62 | 6.36 | 1.00 | .47** | -.22** | .15* | -.16* | .14* | .29** | .22** | -.49** | -.19** | -.22** | -.03n.s. | |
| 関係調整不全 | 17.17 | 4.80 | | 1.00 | -.24** | .45** | -.18* | .18* | .39** | .13n.s. | -.28** | -.11n.s. | -.05n.s. | .06n.s. | |
| 友人に対する感情 | | | | | 1.00 | | | | | | | | | | |
| 信頼・安定 | 35.99 | 6.65 | | | 1.00 | -.35** | .41** | -.14* | -.42** | -.22** | .14n.s. | .08n.s. | .24** | .08n.s. | |
| 不安・懸念 | 17.47 | 6.72 | | | | 1.00 | -.50** | .23** | .53** | .23** | -.10n.s. | -.09n.s. | -.19* | .08n.s. | |
| 独立 | 13.21 | 3.15 | | | | | 1.00 | -.03n.s. | -.42** | -.33** | .22** | .33** | .25** | .02n.s. | |
| ライバル意識 | 8.18 | 3.55 | | | | | | 1.00 | .45** | .09n.s. | -.10n.s. | .07n.s. | -.00n.s. | -.01n.s. | |
| 葛藤 | 8.62 | 3.82 | | | | | | | 1.00 | .24** | -.15* | -.07n.s. | -.14* | -.10n.s. | |
| 友人に求める特性 | | | | | | | | | | 1.00 | | | | | |
| 情緒不安定性 | 15.37 | 5.94 | | | | | | | | | 1.00 | -.45** | -.28** | -.49** | |
| 外向性 | 24.78 | 5.06 | | | | | | | | | | 1.00 | .61** | .49** | |
| 開放性 | 29.46 | 6.05 | | | | | | | | | | | 1.00 | .38** | |
| 調和性 | 33.44 | 5.71 | | | | | | | | | | | | 1.00 | |
| 誠実性 | 32.08 | 6.71 | | | | | | | | | | | | | 1.00 |

**p<.01, *p<.05

次に、各尺度がどのように影響し合っているのかを検討するため、繰り返しのある重回帰分析を行った。まず、ふれ合い恐怖的心性尺度の下位尺度を独立変数、友人に対する感情尺度の下位尺度を従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った。次に、ふれ合い恐怖的心性尺度の下位尺度と、友人に対する感情尺度の下位尺度を独立変数とし、友人に求める特性として尋ねた BigFive 尺度短縮版の下位尺度を従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った。これらの繰り返しのある重回帰分析を行った結果を図 1 に示した。

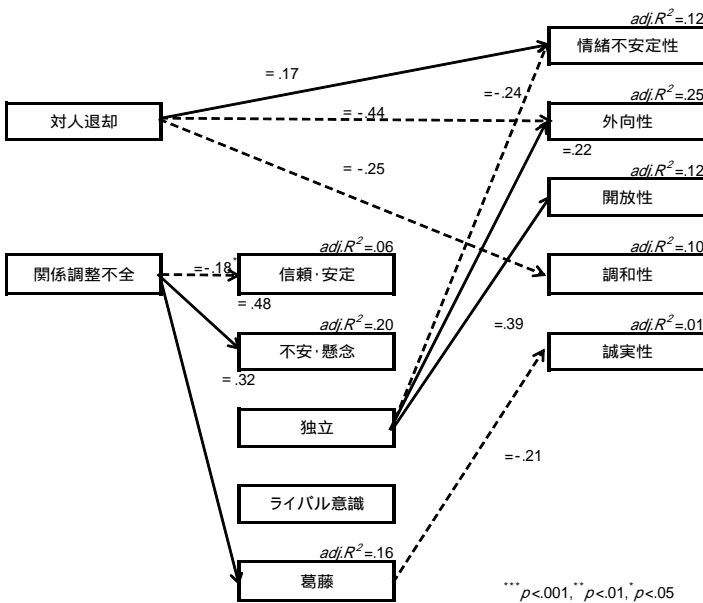


図 1 繰り返しのある重回帰分析 (N= 191)

また、今回調査するにあたり、親しい友人の有無による違いを検討したかったが、対象者の約 98%の人が、親しい友人がいると答え、被験者数の大きな差異により、分析を行う上で十分な数値ではないと判断し、分析は行わなかった。

今回の研究の結果から、ふれ合い恐怖的心性のうち、「関係調整不全」が高いほど、友人への「信頼・安定」の感情が低くなり、「不安・懸念」や「葛藤」の感情が高くなることが示唆された。「関係調整不全」は他人を信頼できない因子であると考えられるため、友人を心から信頼・理解している（榎本，1999）因子である「信頼・安定」の感情が低くなり、友人に対し「不安・懸念」の感情や、「葛藤」の感情が高くなる可能性が考えられる。また、ふれ合い恐怖的心性のうち「対人退却」が高いほど、「情緒不安定性」が高い人、「外向性」や「調和性」が低い人と親しくなりたいたいということが示唆された。「対人退却」は、自分のペースを乱されることなく行動することを望み、人と一緒に過ごすことに苦痛を感じる。そのため、「外向性」の低い人や、「調和性」の低い人、また「情緒不安定性」の高い人に仲間意識があるのではないかと考えられ、親しくなりたいたいという可能性が考えられる。よって、ふれ合い恐怖的心性が高い人が、他人と親しくなれる機会を生むためには、「情緒不安定性」が高い人や、「外向性」、「調和性」が低い人と一緒にいることが良いのではないかと考えられる。また、ふれ合い恐怖的心性の高低に関わらず、友人に対する「独立」の感情が高いほど、「情緒不安定性」が低い人、「外向性」や「開放性」が高い人と親しくなりたいたいということが示唆された。「独立」の感情が強い人は、自分の考えをしっかりと主張することができるため（榎本，1999）、「情緒不安定性」が高い人は苦手である可能性が考えられる。また、友人に対して「葛藤」の感情が高い人は、「誠実性」の高い人と親しくなりたいたいということが示された。「葛藤」の感情が高い人は、身勝手な相手のことを嫌う傾向があるため（榎本，1999）、「誠実性」の高い人と親しくなりたいたいという可能性が考えられる。

しかし、本研究において親しいと思える友人がないと答えた人がほとんどいなかったため、親しい友人の有無による意識の違いは検討できなかった。今後は親しい友人の有無の割合をある程度そろえて分析する必要がある。

(HIRAI Shiu)

二者間の関係性が及ぼす不公正なパレート改善提案への影響

富の最大化と分配における公正感

増山秀史

キーワード：不公正パレート改善提案，パレート原理，公正感，協力行動

目的

人の判断は常に「合理的」というわけではなく、多くは「感情」に左右されがちである。その結果、気づかないうちに本来手に入れるはずであった富を逃してしまっていることがしばしばある。孔子は「寡きを患えず、均しからざるを患う」と言っている。富が少ないことよりも、不平等に扱われることが人にとっての問題なのである。人にとって公正感と、富の総量の最大化はどちらが大切であるか。

分配場面における公正感

公正感の代表的なものに「人の貢献度に応じて分配（評価）される」衡平原理と、「貢献度の大小にかかわらず誰もが等しく分配（評価）される」平等原理がある。これらは場面や対面する人物との関係性によって、重視されるものが異なる。Deutsch(1975)は、競争関係がある場合、衡平原理を公正とし、協力関係を重視する場合、平等原理が公正であると示した。このように公正感を考えるにおいて、場面や対面する人物との関係性には多分の考慮が必要であると言える。

仮説1 協力条件では平等分配が好まれ、競争条件では衡平分配が好まれる。

パレート原理

パレート原理とは「人々の受け取る富の総量が大きくなることは一般に望ましい」という考え方である。田村・亀田(2004)は衡平原理に則った分配よりも「平等原理に則りパレート改善された報酬分配」が好まれ、また平等原理に則った分配よりも「衡平原理に則った報酬分配」が好まれるということを示した。この結果は、集団や相手との関係性によって好まれる公正原理が異なることを越えて、なおパレート原理を重要視する可能性を示している。

不公正パレート改善提案

不公正なパレート改善（以下、不パレ改）とは、二人以上の人間がいる状況において、現在受け取れる公正感に則った報酬と、全員がそれよりも多くの報酬を

与えられる代わりに公正感に則らずに、貢献度の高い者よりも貢献度の低い者の方が多くの報酬を与えられる場合とではどちらがよいかという提案である。

表1 報酬分配例示

| | Aさん | Bさん | Cさん |
|-----|-------|-------|-------|
| 作業量 | 100 | 150 | 200 |
| 報酬 | 1000円 | 1500円 | 2000円 |
| 報酬 | 1500円 | 1500円 | 1500円 |
| 報酬 | 6000円 | 4500円 | 3000円 |

表1に示すように、報酬が衡平原理、が平等原理、がパレート改善である。田村・亀田(2004)は、合議等の社会的な説明責任が果たされるのであれば、そのような不公正であっても報酬量が増加するパレート改善提案が選択されやすくなることを示した。このことから、合議をせずとも、相手の理解を重視しやすい協力関係であれば同様の選択がなされやすくなると推測される。

集団協力ヒューリスティクス仮説

社会的ジレンマ状況における協力行動について、神・山岸(1997)は、「集団協力ヒューリスティクス仮説」を提唱した。これは一度限りの報酬分配場面でも、互いに仲間であるという認識がある関係において、両者が半ば自動的に協力行動による相互利益の最大化を図りやすくなるという説である。したがって、不パレ改提案をされた人の場合、実際には相手から協力的な行動が期待できない一回性の分配場面であっても、互酬性を通じた自己利益の増大を期待して相手の利益を最大化しようとする推測される。

仮説2 協力関係の下では、一度限りの報酬分配選択場面でも、集団協力ヒューリスティクスが生じ、不公正であってもパレート改善提案を受け入れやすくなる。

方法

実験協力者 北海道教育大学教育学部函館校の学生、女性16名、男性18名の計34名を対象に実験を

行った。協力条件が17名、競争条件が17名であった。

実験デザイン 本研究は二者間関係要因の二水準（協力条件・競争条件）×性別要因の二水準（女性・男性）のデザインで行った。

手続き 実験は無作為にペアリングされた2名を1組として実験室に招いた。両者は実験開始から終了までの間、対面することはなく、用意された各ブースの中で作業を行った。作業は主にクロスワードクイズ課題、成績のフィードバック、報酬選択の3つを行った。協力条件では課題の途中で隣のブースの人物へ、不明な問題について質問する機会を設け、二者合わせての高得点を目指した。競争条件ではこの機会を設けずに、個人で高得点を目指した。課題遂行後の報酬選択は、各報酬分配パターン、報酬分配パターンを選択した。報酬分配パターンは 平等分配、 衡平分配、 不パレ改、 放棄の4つであった。なお、課題の成績については参加者全員が相手よりもよい成績を治おさめたとする偽のフィードバックを行った。最後に操作チェックを含むアンケートを実施した。

表2 偽フィードバック得点と報酬分配パターン

| | 自分 | 相手 |
|------|-------|-------|
| 得点 | 156点 | 102点 |
| 不パレ改 | 2340円 | 3070円 |
| 衡平分配 | 1201円 | 785円 |
| 平等分配 | 993円 | 993円 |
| 放棄 | 0円 | 0円 |

結果

サーストンの一対比較法を用いて、各水準で好まれる分配原理を順位付けした。

表3 サーストンの一対比較法順位結果

| | 1番 | 2番 | 3番 | 4番 |
|-----|---------|---------|----------|----------|
| 協力 | 平(0.66) | 衡(0.14) | パ(0.03) | 放(-0.83) |
| 競争 | 衡(0.60) | 平(0.37) | パ(0.19) | 放(-1.16) |
| 女性 | 平(0.84) | 衡(0.36) | パ(-0.35) | 放(-0.84) |
| 男性 | パ(0.49) | 衡(0.48) | 平(0.34) | 放(-1.31) |
| 女・協 | 平(0.87) | 衡(0.23) | パ(-0.49) | 放(-0.61) |
| 女・競 | 平(0.61) | 衡(0.45) | パ(-0.23) | 放(-0.83) |
| 男・協 | 平(0.50) | パ(0.45) | 衡(0.12) | 放(-1.07) |
| 男・競 | 衡(0.62) | パ(0.56) | 平(-0.10) | 放(-1.07) |

表の表記は、不パレ改を「パ」、衡平分配を「衡」、平等分配を「平」、放棄を「放」とする。

考察

まず、協力条件において、相互利益が最大である不パレ改は、平等分配、衡平分配、について3番目であった。また、単純な不パレ改の選択率も競争条件では28%、協力条件では25%であり、この結果仮説2は支持されなかった。本実験で取り上げたパレート改善提案は、それが不利で不公正であったがゆえに、集団協力ヒューリスティクスがもたらすはずの互酬性に対する期待が抑制された可能性がある。したがって、協力者同士の相互利益の最大化は、互いの取り分が公正感に則った場合にのみ目指される可能性が示唆された。

次に、協力条件においては平等原理が最も好まれ、競争条件においては衡平原理が最も好まれた。この結果、仮説1は支持され、Deutsch(1975)の先行研究と同一の結果が示された。しかし性別ごとに分析した結果、男性では同様の結果が得られた一方で、女性では協力・競争両条件において平等が最も好まれた。さらに放棄は全ての条件において選択されにくかったが、女性にとってこの選択は不パレ改と同程度に選択されにくいことが示された。実験終了時のアンケートで測定した質問項目で、女性は競争条件よりも協力条件において「隣のブースの人は好感のもてる人だ($F=9.80, p < .01$)」「報酬分配の選択をする際に隣のブースの人のことを考慮した($F=3.87, p < .07$)」「実験後いつかどこかで隣のブースの人に会うと思う($F=3.57, p < .08$)」と感じていた。このように実験操作による意識の違いが認められたにもかかわらず、利益の放棄と同程度に利益の最大化が図られなかったことから、女性については集団協力ヒューリスティクスが生じにくいことが示唆された。女性は一度きりの互酬性の場面であっても、隣のブースの人物との関係性を考慮し、公正感を重視した分配を選択することが示された。

最後に、女性は協力条件においても競争条件においても、平等分配を1番に選択していた一方で、男性は協力条件では平等、不パレ改を好み、競争条件では公平、不パレ改を好んだ。この結果は関係性や場面の違いにより好まれる公正感が異なるとしたDeutsch(1975)と一致した一方で、男性は不パレ改が公正原理に則った分配と並ぶ、ある一定の選択肢となりえることを示している。

(MASUYAMA Syushi)

大学生活における意欲および自己効力感と

生涯学習に対する意識との関連について

三浦 祥子

キーワード：生涯学習，大学生活，大学生，自己効力感

問題と目的

生涯学習は充実した心豊かな人生を送るうえで欠かすことの出来ない思想であり実践である。現代社会の激しい変化に対応し，自分の可能性を自分で伸ばし，充実した生活を送るためには生涯学習の実践が重要と言える。西岡(2000)によると，我々は生涯にわたり社会の変化に合わせて学習し続けると同時に，長い一生において，各時期に必要な学習を行うことによって課題を達成し，成長し続けていく存在であり，長い人生での自分の位置を確認すると共にそのライフステージに必要な学習をしていかなければならない存在であるという。

川野辺・山本(1999)によれば，生涯学習において重要となるのは，学習の場や機会の整備・充実以上に個々が生涯にわたる学習の意義を理解し，自主性・自律性を基本としてあらゆる学習の場や機会を活用し，実践することである。人の行動の生起に関連した重要な概念として，自己効力感が挙げられる。自己効力感とは行動を起こす際に感じる「遂行可能感」のことであり，自発的な行動の生起に影響を与え，行動への動機づけに強く影響を及ぼすと考えられる。

本研究では三宅ら(2001)の先行研究を基に調査を行い，大学生活における意欲と特性的自己効力感とを取り上げ，現時点での学習行動や自主的な行動の生起に影響を与える自己効力感が生涯にわたって学習をしていく意欲に及ぼす影響を再検討することを目的とする。加えて，大学生活における意欲と自己効力感との関係についても検討する。

方法

調査対象者は，北海道教育大学函館校の学生 234名(男性：99名，女性：135名)であった。集団または個別に質問紙を配布し，回収した。分析では回答に不備のなかった229名を対象とした。

質問紙の構成

1. 特性的自己効力感尺度：成田ら(1995)が作成した23項目を5件法で尋ねた。
2. 大学生活における意欲尺度：下山(1995)が作成した15項目を5件法で尋ねた。
3. 生涯学習に対する意識尺度：三宅ら(2001)が作成した尺度項目を参考に，18項目を5件法で尋ねた。
4. フェイス項目：学年，年齢，性別を尋ねた。

結果

各尺度の下位尺度構成の確認

各尺度に対して，主成分法・バリマックス回転による因子分析を行った。その結果，特性的自己効力感尺度からは20項目2因子が抽出された。第1因子「一般的自己効力感」，第2因子「社会的自己効力感」である。信頼度係数はそれぞれ $=.827$ ， $=.744$ であった。

大学生活における意欲尺度からは，11項目2因子が抽出された。第1因子「学業意欲」，第2因子「大学意欲」である。信頼度係数はそれぞれ $=.715$ ， $=.681$ であった。

生涯学習に対する意識尺度からは，14項目2因子が抽出された。第1因子「積極的学習態度」，第

2 因子「低焦燥感」である。信頼度係数はそれぞれ $=.835$, $=.595$ であった。

生涯学習に対する意識と大学生活における意欲との関係

生涯学習に対する意識尺度と大学生活における意欲尺度との因子得点間の相関係数を算出した。その結果、「積極的学習態度」は、「学業意欲」と「大学意欲」と有意な正の相関が見られた ($r=.526$, $p<.001$; $r=.267$, $p<.001$)。「低焦燥感」は、「学業意欲」と有意な正の相関がみられた ($r=.322$, $p<.001$)。「大学意欲」とは有意な相関関係が見られなかった ($r=.086$, $n.s.$)。

生涯学習に対する意識と特性的自己効力感との関係

生涯学習に対する意識尺度と特性的自己効力感尺度との因子得点間の相関係数を算出した。その結果、「積極的学習態度」は、「一般的自己効力感」と有意な正の相関が見られた ($r=.400$, $p<.001$)。「社会的自己効力感」とは有意な相関関係が見られなかった ($r=.067$, $n.s.$)。「低焦燥感」は、「一般的自己効力感」と正の相関がみられた ($r=.399$, $p<.001$)。「社会的自己効力感」とは有意な相関関係が見られなかった ($r=.077$, $n.s.$)。

大学生活における意欲と特性的自己効力感との関係

大学生活における意欲尺度と特性的自己効力感尺度との因子得点間の相関係数を算出した。その結果、「学業意欲」は「一般的自己効力感」と有意な正の相関が見られた ($r=.471$, $p<.01$)。「社会的自己効力感」とは有意な相関関係が見られなかった ($r=-.059$, $n.s.$)。「大学意欲」は、「一般的自己効力感」と「社会的自己効力感」と有意な正の相関が見られた ($r=.257$, $p<.001$; $r=.406$, $p<.001$)。

考察

概ね三宅ら(2001)の先行研究を支持する結果となったが、今回の研究では先行研究とは異なり「低焦燥感」と「学業意欲」との相関関係が新たに認められた。「学業意欲」が示すような、現在身を置く環境にお

いて「教師に言われなくても自分から進んで勉強する」や「必要な単位以外でも、関心のある授業はとるようにしている」など自主的な学習態度を確立している人は将来どのような環境・立場に置かれても、生活の充実や生きがいの追及を求めて積極的に学習行動を行い、自分なりの学びや評価を重視するなど自律的で、生涯学習に対して高い意欲を持つことが出来ると考えられる。

「積極的学習態度」と「大学意欲」との関連が示されたことから、大学における大勢の人との関わりあいから興味・関心の幅を広げた経験や、サークル活動や行事などの学業以外の経験を通して充実感を得たことがきっかけとなり、この先も同じように積極的に活動し、様々な経験をすることで充実した生活を送りたいという意欲につながるのではないかと考えられる。

「積極的学習態度」及び「低焦燥感」と「一般的自己効力感」の相関関係がみられたことから、一般的な行動に関する自己効力感は学習に対する積極的な意欲や自分なりの学びや評価を重視した学習行動と関連があると言える。高い自己効力感を持った人は、自分に関わる出来事に対して統制感を持ち、自分の努力や自己決定が重要であると考えため学習においてもそのような特徴を示すと考えられる。

「積極的学習態度」及び「低焦燥感」と「社会的自己効力感」との相関関係が見られなかったことから、生涯学習における積極的で自主的・自律的な学習意欲については対人的な領域での自己効力感は関連がないと言える。

大学生活における意欲と特性的自己効力感との関係については、特性的自己効力感が示すような一般的な行動や対人的な領域に関係する自己効力感は大学生活における意欲全体に対して関連があるといえる。自分の可能性に対して肯定的な意識をもつことは学業だけではなく大学生活において積極的に人と関わり合い良い人間関係を築いたり、サークル活動や課外活動などに積極的に参加し活動したりすることに影響を与え、大学生活への適応につながると考えられる。

(MIURA Sachiko)

自らの死を我々はどう迎えるべきか

死ぬまでに準備しておくこと

三浦征次

キーワード：死、終活、エンディングノート

問題と目的

人間は遅かれ早かれ必ず死に至り、また自らの死は一度しか訪れない。現在、日本では医学の進歩による延命治療や臓器移植など、死に関する議論が多くなされている。教育の分野からみれば、「死の教育」といったような、死に対して各人が自分なりに考え、理解を深める場が存在するようになった。また、最近では「終活」という言葉が生まれ、その一環として、エンディングノートなど死に向かうための準備を行うといったことがなされている。

本論文は現在の日本の社会背景を考慮したうえで、死ぬという最後の状態に対して我々が準備すべきことを調べ、吟味しまとめていく。

死へのアプローチ

様々な視点から死を見る

死に対して向き合ってきた 3 人の著書を参考に、死ぬまでに何をしておくべきか、死の向き合い方について考えていく。著者と著書は次の通りである。

金子哲雄(2012)『僕の死に方 ~エンディングダイアリー500日~』

須原一秀(2008)『自死という生き方』

大津秀一(2009)『死ぬときに後悔すること25』

死の新しい実践

「終活」という言葉が近年になって使われるようになり、自らの死について考え、人生の総括を行うといったことがなされている。そこで、終活と、終活の一つであるエンディングノートについてまとめていき、その中で行われている死の準備について見ていく。

「終活」について 終活とは次のことをさす。

人生の終わりをうまく締めくくるための準備
よりよく自分らしく生きていくための活動
身辺整理、エンディングノート、葬式、お墓、医療介護、遺産相続などを考えること

大切な人のために考え、大切な人のために残すこと

エンディングノートについて エンディングノートは、自分にもしものことがあった時のために、伝えておきたいことをまとめておくノートのことである。書籍のほか、ネットでダウンロードもできる。

エンディングノートに記入する項目はだいたい決まっており、次の通りである。 ・私のこと(基本情報) ・自分史 ・親戚、友人、知人リスト ・ペットについて ・私の財産について ・保険、私的年金(個人年金、企業年金) ・介護、告知や延命治療など ・葬儀のこと ・お墓のこと ・携帯電話、会員サービスなど(解約をお願いしたいものなど) ・形見分け遺品の整理(処分品リスト) ・遺言書や依頼相談先リスト ・大切な人へのメッセージ

結論

具体的な死の準備について著書やエンディングノートからまとめ、そこから 10 項目が得られた。本論文を通して、自らの死についてどう迎えるべきか、死ぬまでに準備しておくことについての一つの結論が導かれた。

自らの死をというものを自覚する

自らの死、死ぬまでの準備を考えていくうえで、まず、1 人称の死を見つめ、学び考えようとする姿勢を持つ。

死ぬまでの準備をするための身体の準備をする

死ぬまでの準備を行うために、日頃からの健康には気をつける必要がある。健康でなければ、あらゆる人生の挑戦が不可能になってしまう。

今までの自分を振り返る

自らの死を考えるためにまず、自分自身を振り返り、また自分史を制作することで、人生の総括を図るとともに、良かったことや今までの苦労や後悔を踏まえ、これから自分がどのような生き方をしていきたいのかを考えていく。

自分の死生観について考える

生と死の意味や、死というものをどう捉えたらいいかの一手段として、文献などによる調査や宗教の考え方をすることで、自らの死生観を養う。

自分の意思を示す

死について熟慮し、自分の死生観を養ったうえで自分自身の意思を構築していく。また、自分の生前の意思を伝えることも重要である。そのためには、家族に前もって自分の意思を伝えたり、エンディングノートに記入したりしておくことが必要である。

遺産・葬儀について考え、自分の意思をまとめておく

遺産分与の仕方は早めに決めたほうがいい。一度整理をするために、文章に起こすか、エンディングノートで確認したほうがいいと思われる。

葬儀については、自分と親族の希望が異ならないように注意する必要がある。自分がどうしてもしたいやり方があるのなら、生前に葬儀をしたり、葬儀の計画を完璧に立てておいたりといった方法がある。遺産・葬儀に関しては、何か希望がある人は前もって親族に伝えておくか、またはエンディングノートに書き記しておくのが得策である。

医療・介護の希望をまとめ、何か残しておく

どのような医療・介護を希望するか、考えて自分の希望を伝えておく必要がある。口頭でもいいが、何か紙に書いたほうが残るので確実であると思われる。臓器移植を考えている人は、ドナーカードなどに意思を書いておくことも忘れないようにする。

今のうちにやっておくことを考える

著書の中では、故郷に帰ること、美味しいものを

食べること、続けられるような趣味を見つけること、行きたい場所へ旅行をすること、会いたい人に会っておくこと、良い恋愛をすること、生きた証に何を残すかを考えること、が例として挙げられていた。もちろん他にも選択肢はあると思われる。自分なりに熟考したほうがいいであろう。

自分が最期までやりたいことをみつける

自分が最期まで持ち続けることができるような夢をみつけ、その夢に向かって生きるように心掛ける。

お世話になった人へ感謝を伝える

言いたいことがあっても伝えないままといった後悔をしないように、前もって伝えておくことも大事だが、何かメッセージを残すことも必要であると思う。誰に思いを伝えたいか、どんな言葉をどのように伝えたいか考えてみるのが良い。

以上の10項目は自らの死を迎えるまでにやっておいてほしいことであるが、まずは の「自らの死というものを自覚する」からと、順序をもって行ったほうが自分の考えがより反映されると思われる。

の「死ぬまでの準備をするための身体の準備をする」で次への下準備をし、 の「今までの自分を振り返る」、 の「自分の死生観について考える」へ移行する。自分の死生観を構築したうえで、 の「自分の意思を示す」へ向かう。その後、 の「遺産・葬儀について考え、自分の意思をまとめておく」、 「医療・介護の希望をまとめ、何か残しておく」で、自分の緊急時に必要になりうる情報を先にまとめておく。そして、 の「今のうちにやっておくことを考える」、 の「自分が最期までやりたいことをみつける」で、自分のやりたいことのまとめをしていく。最後の の「お世話になった人へ感謝を伝える」は必ず最後というわけではなく、いずれの順番でもかまわないと思うが、 の「今までの自分を振り返る」を行った以降のほうが、お世話になった人がより洗練されるのではないと思われる。以上の流れで説明したが、もちろん誰もがこの流れを必ず踏む必要はない。中には、順序が入れ替わることやいずれかの項目を行わないということもあり得る。

(MIURA Seiji)

北海道教育大学人間地域科学課程

人間発達専攻心理学分野

〒040-8567 北海道函館市八幡町 1-2

